

瓶  
詰  
の



write : chairou  
ilust: 九十九仇



# 瓶詰の



Write:chairo

Ilust: 九十九仇

## 目次

I. 追想 *Easy way out*..... [P 6](#)

II. 勝利への讃歌 *Here's to You*..... [P 6 2](#)

III. この世界に捧ぐ *News of the world*..... [P 1 0 5](#)

Selection..... [P 1 2 6 ~](#)

目次などのリンク機能推奨動作環境：Google Chrome, SideBooks, iOS ブック

※この pdf ファイルを動作させるにあたって生じたいかなる損害、ソフトウェアの故障にも作者は責任を負いません。上記が生じた場合のサポート、お問い合わせには対応しかねます。

※本作はメインストーリーVol.4の2章以降の内容を含みません。

※ストーリーの関係上、『最終編』とは時系列が異なる物語となっております。ご承知おきください。

## I. 追想 *Easy way out*

まず初めに、貴方に言っておかなければならないことがある。

ここから貴方が触れる話は、君の望んだ話じゃないかもしれない。

二人の瓶詰菓子とでもいうべきものが、泥沼のように、嘯き、争い、滅ぼし合う。そのような血沼の争いが見られるかもしれない。

…少し考えれば子供でも分かる。この世界で誰もが幸せになることなど、ありえるわけがないんだって。

人は世界という箱庭で不条理に搾取され、滅ぼし合い、たったひとつの幸せという資源を奪い合うために争い合う。今から私が語るのはそんな話。

それでも私の読みが正しければ、貴方はページをめくる。

理由は「この本を手を取った」から。

それが、良い事や悪い事の為じゃなく。ただできると思うからやるだけ。そして、貴方の「できる」は「やらなきゃいけない」なんだ。そうでしょ？

言うならばこれは、Kyrie eleison（憐れみの讃美歌）の後に続く、Easy way out（楽なやりかただった）。

それじゃ、準備はいい？…聴くまでもないか。

貴方がこの本を手にした時点で、答えは決まっているような物だからね。

……それでもいいなら、私は話そう。希望という名の安楽、絶望という名の濁々が縋い交ぜになった、一つの瓶詰の世界の話を。

エデン条約の調印式から、そしてわたしの決戦から数か月、いや半年が経とうとしていた。私はあの聴聞会の処分から、ようやくトリニティ学園、独房からの禁固が解けようとしていた。

私は独房内での脱走の罪もあったけど先生やナギサちゃん、セイアちゃんの弁護のお陰で、何とか退学だけは免れることができた。

そして月日が経ち、いよいよその日が来た。

独房の洗面台に向かって、私はその時が来るのを待っていた。いや、待ちわびていた。

「…時間です、聖園ミカさん」独房の当番が言い終わると同時に、牢屋の錠が開けられる。

そう、トリニティでの禁固が解けて、先生に会えることを私は待っていたのだ。

先生には、謝らなければならないことがある。

「もちろん、ミカの味方でもあるよ。」

先生は私の味方だと言ってくれたのに、それを信じなかったこと。

「……任せて、ミカ。」

私がティーパーティー傘下の生徒に私刑を受けたあの時も、先生は私を助けに来てくれたの



に……。私情に任せて先生を追いかけて、猶予が許されないアリウススクワッド達を妨害したこと。

「ごめんね、ミカ。」

「私がきちんと説明をしなければならなかったのに、できていなくて。ミカと向かいあつて、きちんと話をしなければならぬのに」

「だから——アツコを助けたら、一緒にトリニティに戻るよ」

「私が手伝うよ。」

でも、だからこそ信じられることがある。

「私の大切なお姫様に何してるの！」と。

あの人はそう言ってくれた。

わーお、と言いつつじゃあ、先生は王子様かなんかのだろうか。とそうも思ったが、その時から本当に信じられることが出来た。

私の傷は、先生。あなたの傷でもあったんだ。

つまり私の幸せは、先生にとって幸せになれることでもあるということ。

だから、先生と、話したい。先生と話して、ちゃんと謝りたい。勿論、贖罪もあつたけど——シャーレは通っている学園とは別に生徒会なので貢献してくれる生徒を探している。

……つまり先生がその気なら、シャーレの当番になることも許される。

——そんな淡い希望も、わたしはこの時抱いていた。

私はその足で、先生と話しに行くためにシャーレに向かう。

独房ではモモトークは使用禁止なので、今日シャーレに来ることは勿論、先生に伝えていない。

「先生！」

私はその足で執務室のドアを開けた。先生はそこに、居た。

机の上に広げられた大量の常備薬とともに、パソコンに向かって仕事をしている先生。

先生はぼかんとして、私の眼を見つめる。

——先生、ひよっとして顔色悪い？

そう言いかけたが、始めに面と向かつて喋る台詞は決まっていたので、私はそれを口にした。

「聖園ミカ、ついに登場☆って感じかな、先生？」

「……あ、ああ」先生はどこかここにあらずという様子で、きよんとしていた。

「……むゝ、反応悪いゝ。」私は素直に拗ねた。

そうすることで、構ってくれると信じていたからだ。

「あ、ああ……ごめん、でもおめでとう、ミカ」

先生は少し俯いた後、それでも私を祝福するかのように笑ってくれていた。

私はその笑顔を嬉しく感じて受け止めたけど——なぜか、どこかに違和感を感じた。

先生は私の味方でもあると言ってくれた時も、笑っていた。

でも、今の笑顔はそれとは少し違うような——どこか陰りを、感じていた。

「——あれ。なんか元気ないね、先生？」

「……そうかな」ここで、私の勘は確信に変わる。

間違いない。先生は、何か、不穏なことをごまかすように笑っている。

でも、まあいいやと私は言った。

そんなことどうでもいい。どうでもよくはないけれど——この言葉を伝えるほうがよっぽど

大事だった。

「あのね。来て早々迷惑かもしれないなかったけど……でも先生に、お礼が言いたかったの」

私は、覚悟を持った面持ちで先生の瞳をまっすぐ見つめ——そして、笑顔を見せた。

先生はそれを、真摯な面持ちで迎える。

「ユスティナ聖徒を相手に立ち向かった、あの時に——わたしを見つけてくれて、ありがとう。わたしを救ってくれて、本当にありがとう。」

私がここに居るのは。ここに立っているのは先生のおかげ。その恩を、少しでも先生に還したい。だから——。

そう言おうとしたけどそれを手で遮って、ミカ、という声がそれを遮り、先生は、ある事実を言った。

私はもう——先生じゃ、なくなるんだ。

「——え？」私はびっくりした。なんで。そう続けようとしたけど、言葉通りの意味だとあの人は言って、「いつかは分からないけど——私は、近いうちに先生じゃなくなるんだ」突然の言葉に驚く私に、まるで審判を告げるように——そう静かに告げた。

だから、恩返しをしてもらっても君の望む役割は果たせないかもしれない。

ごめん、とただそれだけ先生は言っていた。

私は、そのことに対して一回深呼吸してから「……それでも、いい」と言った。

「先生が先生じゃなくなるとか、そんなこと関係ない。わたしが視ているのは、あなた。先生じゃなくてあなたなんだよ」

「……ミカ。」

「たとえあなたが先生じゃなくなったとしても、あの時の贖罪のために——わたしはあなたの役に立ちたい。ただそれだけだよ。」

だからわたしにできることがあったら何でも教えて。そう言いきって、私は答えを待った。

「……そっか。じゃあ、約束してくれるかい」

先生はそう言って、こう向き直って私に告げた。

「私はそのうち、自身のことを打ち明ける。そして君は私が『そうだった』訳を目にするかもしれない。それでも、君は——自棄にならずにちゃんと卒業まで、自分の役割を終わらせてくれるかい。」

先生は、どこか辛そうな表情で、私に言ってきた。

私は、その先生の辛さを何とか癒してあげたかった。そう思ってた。

「……分かった。あなたの言う”それ”が何かは分からないけど……誓うよ、先生。」

それがあなたの望みであるなら、喜んで、わたしはそれを受け入れる。

断る理由はない。それが、先生——あなたの為なら。

「私は”真実”が明らかになくても、自分を捨てずに、あなたの望むことを遂げて見せる。

——もう、今までの私じゃないんだから。見ててよ、先生」

もう、今までの脆い”魔女”の私じゃない。例えばどんな残酷な真実だったとしても、私はそれを受け入れる。そう、私は誓った。

「だからそれを話して、先生。……あなたの辛さを、わたしも背負いたいから」  
私を意を決して、先生に向き直り、答えを待った。

「じゃあ——ミカ」そう言って、先生が何かを打ち明けようとした矢先。

持っていた携帯のベルが鳴った。

「ごめん、待って」

できることなら、そんな携帯、捨ててほしかった。そう言おうとしたけど、それは私の単なるわがままでしかないことに気づき口を噤んだ。

「はい、はい、——了解しました。それでは」待って。まだ私は、あなたに何も聞いてない。あなたが始めたことを、聞いてすらない。

「ごめんミカ。緊急の——」「そうやって、言い訳に逃げるんだ？」

「……」。先生は申し訳無さそうに俯いた。いいよ、私はそれでも、と続けて、

「でも、あなたは苦しくないの？……そんなことばかり、してて」「……そうだな」

先生はどうしたものかな、と天を仰ぎこう言った。

「今日の夜、私は空いてる。——そこで、良かったら二人で話したい」

「……分かった。それまで、私は待ってる」

本当？夜まで待ったら本当に、打ち明けてくれるの？……そう言いたかったけど止めて、

私は別の言葉を紡いでいた。

「じゃあ、これ」せめて、邪魔にならないように。そう願って、持っていた小箱を渡した。

「これは何だい、ミカ」

「ショートケーキ。お疲れかなうと思って。たまには糖分取らなきゃダメだよ、先生？」

私は出所に渡された、本当に少ない支給クレジットでショートケーキを買ってきていた。

「ありがとう、改めて頂くよ。」先生はどこか儂そうな笑みで、それを受け取ってくれた。

「じゃあ、その時間まで邪魔にならないように、しておくから。——言っとくけど、今度こ

そキャンセルはなしだよ、先生？」

「ああ、分かった。大人の責務に変えて、約束する。」

私は約束した。これで、先生がその約束をキャンセルすることはない。

先生はここぞという時の重要な局面で、必ず今まで「大人」という言葉を使ってきたからだ。

「……それじゃあね、先生。休憩、ちゃんと取ってね」

そう言って、私は向き直り、執務室から去ろうとする。

数歩歩いた所で、先生が私を呼び止めた。



「……ミカ」

「……何？」

私は流し目で、先生を見た。

先生はどこか伏し目がちに、申し訳なさそうに言った。

「すまない。想ってくれてるのに、こんなことになって」

「……分かってくれればいいよ。それだけで十分だから、先生？」

そう言つて、私はシャーレを出た。

夜が訪れるのを、心待ちにしながら。

「待った？」

「ううん、全つ然☆……そっちこそ、体調は大丈夫？」

「問題ないよ。さあ、行こうか。……ミカ」

先生はそう言つて、掴んだ私の腕を引っ張ってくれる。

私たちは、トリニティ近郊のマーケット街に来ていた。

「うんうん☆それで、話なんだけど、……その前に、ショッピングしていい？」

「どうして？」

「私はトリニティの生徒だし、前の物とかは燃えちゃったしで……今日中に、買つとかなきゃいけないものが結構あつてね。……昼間は学校に戻っちゃったしで行く暇なくてさ」

「分かった、そっちの方が大事だね」

「いいよ、ミカ。先にそっちに行こうか。そう先生は頷いた。」

「やった！色々買いたいものがあるの。」……私はこの機を逃さんとばかりに、先生の腕を引っ張った。できるだけ、二人きりの時間を延ばせるようにと願いながら。

「うーん、夜空が綺麗……。やっぱり外の空気は気持ちいいねー！」

「嬉しそうだね。」

「そうかな？まあでも、外を自由に歩けるのは嬉しいよ。前から大分変わったから、慣れるまで時間かかっちゃうと思うけど」

「そんなに生活変わっちゃったの？」

「んー今までは建物を一人で使ってたんだけど……」

そんな感じの、他愛のない会話をしながら、私は書店を巡ったり……ショッピングモールを巡ったりした。

「……こんなつもりじゃなかったのに……。ごめんね、先生……。」

「大丈夫だよ。」

私は、ショッピングモールを出て、先程の犯した失敗を戒める。

そう、私は無くなった水着と体操着、衣類を買おうとしたんだけど。残高が足りず、先生が、大人のカードでそれらを支払ってしまった。

「私は、先生と買い物を楽しみたかっただけなのに……。」

「これからは、計画的に使わないとね。」

「……なんでこんな……情けない姿ばっか……。いつも私って、先生に迷惑かけてさ……。」

「学園生活に必要なものだったから、いいんだよ。……だから、これからも頑張ってるね」

「……うん。ありがとね、先生……。大切にします。」

そう言ってくれたのが、唯一の救いのように感じた。

私は、貰った袋を、大切に握りしめていた。

「じゃあ、そろそろ……話をしたいんだけど、いいかな？」

「……うん。どこで話そうか☆」

「この先の喫茶店とか、どうかな……あ」

先生の、視線が硬直した。

「……先生？どうしたの？」

思わず、先生の視線を追う。

「……ミサ、キ」

「……先生？」

そこには、私が赦した者達の一人。

ここに居ていいはずが無い、アリウススクワッドの戒野ミサキが居た。

「……え、先生？その子、は」私は思わず、先生の顔を見た。

明らかに、表情は狼狽え、硬直しているように私には視えた。

やがて数秒の沈黙の後、戒野ミサキが口を開いた。

「……先生」

「……ミサキ、これは、その……！」

「私のこと、断ってまで？」

「……ミサキ」

「……とても暇なんだね。大人なのに」

「……ごめん」

「……もういいよ、先生。仕方なかったんでしょ？」

「う、うん」

「え、どういうこと？……先生？」

戒野ミサキ。

私が片棒を担いだ「エデン条約」に関するテロの実行犯、アリウススクワッドの一員であり、

そして、……私にとって、これから忘れられなくなる相手になる人だった。

「え、……あなたこそ、どうしてこんな所に？」

「……はあ」ミサキはため息をついた。

まさか、こんな所で再会するとは、思ってたからだ。

私は、驚きを隠しきれないまま、ミサキに声をかける。

「……久しぶり。元気だった？私のはあんまり元気じゃなかったけど」

「……別に。何が言いたいのか？」

「……指名手配犯がこんな所に居て、いいの？」

ごく単純な疑問を、口にしたただだった。

「……っ！」「……あ」

「……まさか、もう刑期を終えたとか、……言わないよね？」

私は、煽るつもりすらなかった。

それがこの人にとっては、とても不快であるようだった。

「先生、……こつちに来て」「……ミ……!!」

ミサキは強引に先生の腕を掴み。先生を連れて行つた。

「……ま、待って！」

私は、慌てて為すがままにされる先生を追いかけようとする。

追うな。

先生を追っていく私に、直感が鳴り響くようにそう告げた。

回れ右して、来た道を戻れ。……さもないと、お前は後悔することになる。

まるで白雪姫に囁く魔女のように、私の勘は告げていた。

「……っ」私は、ミサキが曲がついていった路地裏についた。

私の直感が確信していた。これから起こることは、絶対に自分にとって良くないことだと。

それでも、私は見るしかなかった。……私の胸に疼く予感を、否定したかったから。

——私はこれから、確信することになる。

私の信じた王子様は、私”だけ”の、王子様ではなかったのだと。

「……先生っ！ どういうこ、と……。」

先生とミサキは、すぐに見つかった。

私は路地裏に踏み入り、荒げた口調を崩壊させるしかなかった。

それは、私の中で悪夢にも等しかった。

路地裏の奥。そこでは、戒野ミサキが、先生に口づけを交わしていた。

私の、先生に。

「……何をしてるの、先生っ……？」

私は、震えた声で先生にそう聞いた。聞くはずだった。

すると、その女——ミサキが、先生の口元から外して、こう言ってきた。

「証明しておきたかった。」



私はもう指名手配犯じゃないし、

先生は——あなたの先生でもないことを」

私は、テロリストじゃない。

そうゆつくりと宣言するように、ミサキは言ってきた。

「……っ……！」私は、ぎり、と指を噛んでからそっか、と言ったつけ。

この光景に対して、ただ「そっか」、と。

「……ミカ、こんな事になってごめ」「謝らないで。先生は悪くないんだから。」

私は守護銃を構えた。「……。」ミサキも、それに応じるように背中のロケットランチャーを構える。「私が間違ってたんだ。先生、見ててね、今からそいつを——」「違うんだ」

「何も違わないよ、こんな事になって！」構わず私はミサキに狙いをつけ、掃射した。

ダダダ、とタイプライターを強く叩いた様な掃射音が路地裏から街内に響き渡る。

「わっ!?!」「きゃあっ!」トリニティの生徒や市民が驚く中、私は袋小路の路地裏に向かって連射する。ああ、やつちやつたな、と思いながら。

これはまた懲罰かな。いや、こんな事懲罰にも値しないだろう。だって、私はただ路地裏の

鼠を駆除しようとしているだけなんだから。

「私が、先生との時間をどれだけ待ち望んでいたか……あなたには分からないだろうね！」  
「……。」

だから、少しは痛い目見たらいいよ、そう思った。

だけど、マガジンを終える前に、なぜか弾が出なくなつて。

「あ、れ……？なん、で」

「……ミカ」硝煙で覆われた先を、私は見たくなかった。

「うそ。やめてよ、せんせい」

なんで、そいつをかばうの。

「……少しやりすぎだよ」そう言いながら、先生は私の前に立ち塞がる様にして立っていた。

「先生！」誰かがこちらに向かっている。その制服は、正義実現委員会の服だ。

「……っ……」

「何があつたんですか！？お怪我は！？」たまたまそこに居たらしい、下っ端の子だ。何度か顔を見た事がある。

「ないよ。大丈夫」先生とも知り合いのようだった。先生は、手で土煙を払う。

下っ端の子は私の方を見て、「聖園、ミカ……？　いったい何が？」

ああ、と先生は平然として、「私とミサキが暴漢に襲われてね。ミカが追い払ってくれたんだ。」

「え、ちが……っ」「そうだよ、ミサキ？」

「……私の中でも、十分だった。それだけ」「待ってよ……っ」「断じて何も無かったよ。そうだよ、ミカ？」「……っっ！」

違う。断じて違う。全部私の我儘で、全部私が悪いんです。そう言ってしまったかった。だけど、それを言うことはできなかった。それを言ったらもう二度と、私は生徒じゃなくなる。

それでも、君は——自棄にならずに、自分の役割を、終わらせてくれるかい。あの誓いの重さを、今ようやく理解してしまった。「……はい。なにも、ありませんでした。」

「……ミカ。すまない、こんな事になって。」下っ端の子を送った後、ミサキを尻目に先生は言っていた。

せんせい、それは本心からあやまつてるの？

私のところは、ぼろぼろになっていた。「……いいよ。仕方なかったんでしょ？」

そう言うしかなかったけど、「仕方なく、ない。全て私の無責任が招いた結果だ」先生はそう返した。

「無責任って……どういう事、それ？」「……ミサキ」ミサキが先生に問い詰める。

「確かに私は、君に同意した。でもその中で、君は償うと言った」「……。」

「君はその身を持って私の代償を償うと誓った。……その中で、答えが見つかるかもしれない。そう思って、君を見ていくことを思った。……でもそれは、ミサキが、私を君のものだと見せつけることには繋がらないはずだ」

「……ごめん、先生」「…謝るのは、私じゃ無いと思う」「……。」

「ごめん。いきなり先生にこんな事をして……当然だよ、怒るのも」「……いいよ。よかったね、お尋ね者から解放されて」「……。」

私は少し考えて、先生にこう言った。

「先生、この子が今自由に歩けてるのって、先生のお陰？」

「……ああ」

「そっか。…頑張ったんだね、先生も、ミサキちゃんも」「ミカ」

「……つまり、そういうことなんでしょ、先生？」「……。」

そう。何で先生はミサキを放ってまで、私を呼んだか。

先生は、私に自分自身を諦めさせるために、私を呼んだんだ。

「それでも、……私は、今日のデート、楽しかったよ、先生？」

「……まだ、伝えなきゃいけない事があるんだ、ミカ。」「？」

「私の「代償」の話だ。ミカ、私は」「……いいよ。もう疲れちゃったから」

「ミカ……！」なんでこうなるんだ、という表情を先生はした。

その顔にさせておくことが、せめてもの私なりの仕返しだった。

……やつぱり私、悪い子だ。心のどこかでそう思ったけど、それは言わなかった。

「……じゃあね、先生。今日は楽しかったよ。…ほんとに。それと」

また、悪い考えがよぎった。

私は結局、脆い魔女のままだったんだ。

なら、魔女らしく、あの人に消えない傷をつけたかった。

「私を「お姫様」って呼んでくれて、ありがとうね」

そこから私は逃げた。答えを訊かないように、一目散に逃げ仰せた。

トリニティの僻地の宿舎、眼前に迫った非常階段を一直線に駆けて、気付いたら部屋に着いていた。

「…あはは、馬鹿みたい。「お姫様」だって」

傷みと汚れでぼろぼろの壁に、わたしは手を打ちつける。

「信じなければ、こんなことにならないのかな」

あの壁はまるで私だ、と思った。使い古され、何の甲斐なく放置される私そのもの。

「忘れられれば、こんなことにならないのかな」

どうか、忘れたい。そう思ったけど、脳裏に浮かぶのは、教会で戦ったときのあの足音。

まだ、駆け付けてくれると思ってるんだ。馬鹿だなあ。……

「…寂しいよ、先生…。」

わたしには先生、あなたしか居ない。

あなたのために、これからどんな仕打ちにも耐えていこう。そう誓ったのにな。

泣きじやくる私を包んだのは、沈黙だけだった。

私はこの選択を恥じた。せめて、ミサキに憎まれても本当の事を最初から言っていれば。そう悔やまずにはいられなかった。

いつか、聞いたことがある。何かを選択するということは、何かを放棄するということ。誰かを救うという事は、誰かを救わないという事だと。

いつかだと思っていた。まだ猶予はあるだろうと。でも、今だった。

……いや、あの時あれを使った時から、私は既に教師失格だったのだ。

どこか不機嫌なミサキと別れて、思い悩んだ。

挽回出来るなら、教師としてミカにもう一度接するべきか。

それとも、教師の名を返した一人の代償として、ミサキに向き合うべきなのか。

答えの出ないまま、薬を打ち、夜が明けようとしていた。モモトークの通知が来る。

『おはよう、先生』

ミカからだった。

私は急いでスマホを手に取り、返信を打つ。

『…ミカ！昨日は、本当にごめん！』

『あやまらなくていいよ、先生☆』

『すまなかった、私、ミカのことを』

『それなんだけど、話の続き。今日はどうか？やっぱ忙しい？』

『ちょっと忙しいけど…夕方には落ち着くと思う』

『…言っとくけど、昨日みたいにミサキちゃんをだますのはナシだよ、先生☆』

『…はい。肝に銘じました…。』

『じゃあ、ちょっとだけ時間もらえる？ほんと、ちょっとでいいから』

『分かった。仕事が終わったら向かう』

今度こそ、私は大人として間違えるわけにはいかない。そう思った矢先だった。仕事が終わわり、私はミカに指定されたトリニティの学生寮前まで到着していた。思った以上に仕事が付かず、約束した時間より遅くなってしまっていた。



「ミカ……！」

「あ、先生だ☆」

「遅くなつてごめん。待ったよね！？」

「ううん、先生が忙しいのは知ってるから。私は今すっごいヒマしてるし、大丈夫大丈夫。」

「ミカ。昨日は、本当にすまなかつた……！」

「……気にすることないよ。……んー、えっとね、『代償』の話だけど」

ああそうだ、と先生は言つて

「そう、……ここら辺、どこか話せるところはあるかな」

「……ないんだな、これが」

え？、と先生は聞き返す。

「もうだいたい遅い時間だし、開いてる店もないと思うし」

……すまない、と私は目を伏せた。

できることなら、大人のカードを使ってでも店を開けさせてやりたい気分だった。

「せっかく来てくれたのに、どうしようね……。」

と、ここでミカが思い至り、何かひらめいたような笑みを浮かべる。

「あつ、私の部屋とかどうかな？」

「…ミカの部屋？」

「あつ！変な意味じゃないよ！部屋っていつでも、寮の一部の空間というか……」

今日はお休みの日だから、門限も遅いんだ。そのミカの言葉を、信じることにした。  
いや、元はといえば私が悪いのだから信じるほかなかった。

「…すまない」「いいよ、ちよつと話して、ささっと帰れば何の問題もないと思うよ☆」

「じゃ、行こっか！こっちこっち！」

どこか弾むようなミカの足取りに、私は続いた。

「（かなり古び……歴史がありそうな建物だ）」

そう思いながら、古建築の建物を上へと進んでいく。

「ごめんね、ちよつと寂れた場所だよね。」

ミカの部屋は一番上にあると言う。そこへ行く為に非常階段を登らなければならないのは驚

いたが……。

私は特例だからね、と言ったミカの言葉に辛さが混じってないか、私は気にしてしまった。気にしたついでに、階段を踏み外しそうになった。

「着いたー！」

「……ここでもしかして、屋根裏部屋……！？」

私はそれが失礼だと考慮せずに、呟いてしまっていた。

「……そうだね、屋根裏……」

トリニティとは関わってそれなりに経つが、その校風に対して、私はまだ何一つ知らなかったし、疑う気もなかった。

まさか、ここまでとは。……そんなことになるとは、私も驚いていたのだ。

「……うーん、そろそろ……」

「そろそろ？」と私が言った途端に。

ベルが鳴り響いた。

「！？」「あつ、来たか☆」

『それでは点呼を行います！』と、寮の担当らしき者の声が響く。  
瞬く間に正門は閉鎖され、待機を促す告知が告げられる。

「え、ちょ……！！」

「先生、たいへーん！寮長がこっちに向かつてきてる！」

私はミカに言われるがまま、ミカの毛布を被り、寮長をやり過ぎしかない。

どこか甘い匂いに身を包まれながら、まずいな、こんなはずじゃない、と心の中で歯噛みしながら。

「先生、もう大丈夫。出てきていいよ。」

「……ミカ、どういふこと……？」

私が布団を出ると、そこには夜景に照らされ、風に晒されたミカがいた。  
しーっ。そう云いながら、ミカは指を立てる。

「……先生、あなたが悪いんだよ。」そう言つて、手首のシュシュを外しながら。

「……！」私は絶句した。

なんでこんなことになるんだ。そう思いながら。

……斬ったよ。斬っちゃった。あはは、ばかみたいだね。涙目になりながら。

ミカの手首、シュシュで隠していたそれは、深く横一文字に傷が付けられていた。

ミカは縛っていたらしい、血に濡れたシュシュを窓から投げ捨てる。

この様子だと、私と会う前に斬ったみたいだ。哑然とするしかなかった。

いつも包帯巻いてるあの子と同じになれば、私のこと、少しはわかってくれるかなって。

やめろ、ミカ。そう思ったが、口から声が出なかった。

先生、あなたがおもってる以上に、わたしはこわれてたんだよ。

「……さらに、きずつけば」ミカはそう言つて、更に傷をひつかき、血を出そうとする。

やめる。やめてくれ。そう思つて、私は阻止しようとする。

……さらに傷つけば、わたしのこと、わかつてくれるの？

……ミカは縋り付いて哭いていた。

その軀を寄せ付け、泣きながら私に縋り付いていた。先生、と胸の中で聲がする。

トリニティは魔女を許すことができない。……あなたは時々、私に声を掛けてくれるだけで良かった、それだけで救いになった。でもあなたは、アリウスのミサキに愛を誓っちゃった。

……もう、取り返しはつかないんだよ。

ねえ、その代償は誰が払ってくれるの。……私にはあなたしかないんだよ、先生？

……ミカ

なに？

君の言う通りにはできない。すまない。

私は心から詫びながら、そう言うしかなかった。

くつついていた手を振りほどき、ミカは離れて、こう告げた。

「……先生は、騙されたんだよ。」

まだ夜は私のもの。ミカは誇るようにそう言った。

——どうしようね？

もう、朝までここにいろしかないよ？

あれほど「私を信じないで」って言ったのに。まだ私を信じてくれたんだね、先生。

……ふふつ、だからこんなことになるんだよ。ねえ、先生？

……ミカ………！

…私が問題児だってことぐらい、先生だって知ってたでしょ？……

まだ主導権は私にあるの、そう宣言するように。

夜は長いよ。言っても効かないなら、私に分からせてあげる。いくらでも。

「ミカ」

観念したかのように、先生の力と息遣いが緩んだ。

あと少しだ。あと少しで、解ってもらえる。そう信じていた。

「……なにに、先生？」

私は微笑み、そう告げた。だけど、思いもよらない応えが返ってきた。

「残念だが、時間切れだ」先生の貌が黒くなる。

表情は、表せないほど濁り、いや、それは私の知るそれじゃなかった。

私は、初めて先生に恐怖した。

違う。あなたをこんなことにさせたかったんじゃないの。

ほんのちよつとでいいから、先生と一緒にいたかったの。

「聖園ミカ。おれが払った代償を、お前も払うことになるぞ」



その言葉は、凍り付いた。

……あなた、だれ？これは先生じゃない。それは：

例えるなら、不可解な存在。ともいうべきものになっていた。

この時、私が知る先生は何者でもなかった。

「——ミカ。」

「……せん、せい？」

私は怯えていたが、見た表情は先生のそれに戻っていた。

よかった。心の中で私は安堵する。しかし、先生は告白した。

——私は、その言葉で殺された。身をもって、代償を払うことになった。

「私は死ぬ。……ミカ。私はもうすぐ死ぬんだ。」

私の寿命は、持ってあと2年。私はもうすぐ跡形なく消え去るんだよ、ミカ。

「……！」言葉が出なかった。

先生が消える？どういうこと？

「これが、ミサキを救うために払った代償だ」

嘘だ。そう言いたかった。私は歪んだ。

先生は死んでも、いや死んだ後も戒野ミサキのものになるってことじゃなか。それって。

「ぐっ……！！」

え、どういうこと？それは聴けなかった。

先生が突然、胸を押さえて苦しみだしたからだ。

「先生！どういうこと……！！？」

「言ったろ。時間切れだつて。寿命だよ」

「でも、まだあと2年あるって……！！？」

「……普段打つ注射薬を、シャーレに置いてきた。……ここまで長居するとは、思わなかったからね」

「……あ」

また、私だ。私のせいだった。

そんな。いやだ。私のせいで、先生は死ぬの。

「……誰か！来て、だれっ」

叫び始めたその声を、先生は苦しみながら押さえた。

「……ミカ、すまないが……セリナを呼んだ」

私を抱えて、静かにこの寮を抜けてくれ。…頼めるかい？

うん、うん。と私は、頷くしかなかった。

私は、窓から先生を抱えて飛び降りて、指定されたトリニティの校門前まで向かう。

「せ……先生っ！！」

「っ……。」

救護騎士団の一人、鷲見セリナが涙目になりながら校舎から出てくる。

私はその子のまつすぐ眼に、思わず俯きながら指示を待つ。

「しっかりしてください！こんなところで斃れたら……ダメです！」

「せ、りな……注、射は」先生は、項垂れながらセリナに手を伸ばした。

「持ってきました、ここにありますが……ちよつと我慢してください、ね」

セリナは力ない先生の首元に対して、冷静にわずかコンマ数秒ともいえる時間で注射を完了させた。

「……う、う……」先生の力が抜け、その場にへたり込んでいく。

「……鎮静剤の量を多くしておきました、しばらく痛みは感じないはずですよ」

「……たすか、るよ」

「もう、先生は何も考えず休んでくださいね」

先生を癒すようにその子——セリナは微笑む。

私は思う、なんで、先生はこうなったのだろう。余命の事、戒野ミサキの事。——持っている注射は恐らく特別製だろう。いざという時のスペアをセリナが持っているなら——知っているはずだ。先生が「こうなっている」理由を。

「あ、あのっ……何か知ってるの、先生の事！」

「……先生が注射を持ってないということは」

私は意を決して、声を掛けた。……だが、敵意を持った目で睨まれる。

まるで魔女を見るような疑心の目だ。

「この事態が想定外である証拠です。……教えてください。何があったのかを」

「……っ、それ、は」

「話はそれからです、場合によっては」とも付け加える。

どっちにしろ、ここに居る時点で私はまた聴聞会に突き出されるだろう。

仕方がなかった。というより、もうどうしようもなかった。私は口を開き、

「……ミカの補習に付き合ってたね。こんな時間になってしまった……。」

先生が口をはさんだ。授業に熱が入ってたね。そうこうしてるうちに正門が閉鎖されてしまった。次からは時間をよく確認しておくよ、すまない。

「……先、生……！」どこまで、あなたは。違うの、悪いのは私。そう言いたいけど、貴方への思いで口がうまく動かない。

「……セリナ、頼みがある」

「……はいっ」

上述した通り、悪いのは私だ。

でも、残念だがこのご時世だ。このことを聴聞会に報告すると根も葉もない噂が立つだろう。

「悪いけど、黙ってて貰えるかい？…ミカのことを」

「……先生の望みなら、それを受け入れます」それだけ言つて、セリナは先生を運ぼうとする。

「……待つてよっ……」「ミカ。」引き下がるわけにはいかなかった。それでも私は、セリナや先生から真実を聴きたかった。

何があつたのか。戒野ミサキとの間にどのような誓約があり、それで彼女を救つたのか。

そして、なぜあと寿命が2年しかないのか。

「…すまないが、壁を伝つてあの窓から部屋に戻つてくれ。これで何もなかったことにする、から」

「私……先生から、何も聞いてない。寿命の事を」

「……」。「…そういえば、あなたは知らないんですね、監置されていたから」

「補習は嘘。私は先生にこの事を聞くために、ここに呼んだの」

「……そうですか」少なくとも嘘は言っていない。

私は先生を担ぎ、無視して通り過ぎようとするセリナの前に立つ。

「教えて。……あなたでもいい。先生に何があったのかを」

「……話を聴くなら、付いてきてください」セリナは、歩みを進めた。

彼女がようやく口を開いたのは、医務室に続く階段を登っているときのことだ。

……本意ではありませんが、先生に万が一のことも任されていますから。

そう言っ、階段を一步ずつ登っていくその足取りは、とても重く感じた。

「アリウススクワッドの、戒野ミサキさんは知っていますか」

「……一緒に共謀したもん。忘れるわけじゃないじゃん」

「彼女は、一度ヴァルキューレに捕まりました。」

「えっ……。」

初耳だ。どんなに牙を抜かれても、所詮彼女は精鋭。指名手配されたとはいえ、ヴァルキュー

ーレの部隊程度に負ける道理はないことは、私が一番よく分かっていた。

「ゲヘナとトリニティは互いに処罰執行のため身柄の引き渡しを要求。彼女は、司法取引の場でヘイローを破壊される求刑が言い渡されたそうです。」

私は、指名手配犯じゃない。

戒野ミサキの言葉が、今になって重く響く。

「それを、先生が助けたってこと？…どうやって？」

「……公の場では、先生は関わっていません。」

ただ、あの時、白洲アズサが阿慈谷ヒフミによって助けだされた最中。

「防犯カメラに記録されていた映像、クロノスに保存されている証拠メディア。さらには証言の調書に至るまで——アリウススクワッドがその場にいた証拠、ひいてはエデン条約のテロに加担したという記録全てが、ミサキさんが監置されたあの日を境に「損壊」しました」

「——え」



「損壊したデータに関しては改ざん、侵入された痕跡もなく、ヴァルキューレとクロノスとともに管理側の不手際であると発表。ミサキさんは証拠不十分により釈放されました」

「その発表の一日後です——先生が倒れたのは」

セリナは思い出すかのように、冷汗をかいていた。

医務室に辿り着き、先生は寝息を立てている。

「全身が痛いと言って、すぐに精密検査を受けました。——それで、分かったんです。」  
セリナはここで口を噤む。

「——何が？」

あまりにも返事がないので、私は思わず聞き返した。

いいですか、落ち着いて聞いてください、と。セリナは私に、忠告するように告げた。

今、先生の、身体的な機能は70歳同然になってしまっています。

そしてさらに、老化は日に日に進みつつあります。——その計算で行けば、あと2年持たないでしょう。

「——え」分かっていたことと言えば、分かっていたことだったが、私の声を震わさない理由には、何一つならなかった。

「今、先生が先生でいられるのは、この注射薬のお陰です」セリナは先程先生に打ち付けた注射薬を指さす。「ミレニウムが開発した薬で、細胞を活性化させます。…ただ、再生と代謝を無理やり行うものなので、何度も使えばそれだけで命が縮まる代物です」

それでも、やるべきことがある、と先生は言っていました。  
だから私も、それを持つことにしました。

セリナは意を決した表情で、私にそう言った。

「——なんで」「……」。セリナは無言のままだ。

「なんで先生がアリウススクワッドを匿ったら、それだけで寿命が縮まるの！？おかしいじゃない、そんなの！」

…あなたは不思議に思わないわけ。セリナに対してそうも言った。

「…噂には聞いたことがあるはずです。先生の「大人のカード」の存在を」「それを使ったら、

寿命が縮まるってわけ……!?」「……おそろくは」

「じゃ、なんでアリウス達に全部使っちゃったの。…意味、わかんない」

あの子たちを解放することが、先生にとってそれほど重要だったの。

自分が何やったか、解ってるの。先生を起こして、問い詰めたぐらいだった。

「……先生は、あの子たちの事を心配してたことだけは憶えてます」

セリナはそう言い、……でも、本心はあの人に聞かないと分かりません、と付け足した。

「……あなたは、わたしが先生のことを聞かなかったと思いますか?」「……え?」

「私だけじゃありません。退院してからユウカさんも、イズナさんも、恐らくあの時シャーレに関わった人間みんなが聞いたのだと思います」

なんでこんなことになったのか、と。でも、先生は答えてくれませんでした。

……それ以来、日に日にあの子の笑顔は減って……ついには、教職を辞めようとするまでに至りました。後任を後で紹介するから、と言って。

「……」。私は言葉が出なかった。

「……ですが、聖園ミカさん。あなたなら打ち明けてくれるかもしれません」

「え？」私は聞き直す、しかし、その直後、手首に激痛が襲った。

「救護騎士団の眼は誤魔化せませんよ。」

私は、自分で傷付けた手首の傷に、消毒液を塗られたのだ。

セリナは笑顔で、こう告げた。

「ミカさん。……嘘なんですよ？補習も、先生の「代償」を聞くって話も。」

「つ……、」心の中が見透かされているようだった。

あなたはただ、傷付いた自分を先生に癒してもらいたかっただけ。

だけど、人が人を癒すのは、そう簡単には出来ないと思うんです。

だから、このことは黙っててあげます。セリナはそうも言っていた。

「……セリナ、ちゃん」

「前に、貴方がユスティナ聖徒と戦った時、団長はアリウス生達に向かってこう言いました。  
「彼女たちもまた、救護が必要な方々であるというのに」と。」

あの時の言葉の意味が、今、ようやく分かった気がします。

そう言って、セリナは手首の包帯をぎゅっと握った。

「いっ……!」「処置、終わりましたよ」

だからあんまり、先生に迷惑かけちゃ駄目ですよ？

セリナはそう言った。

「でも……ちよつと羨ましいです。先生に、こうして甘えられるの」

「……そっか、ごめん」

「私に謝る必要はありませんよ。……でも」

セリナは口元に人差し指を充てた。

私じゃ先生を、治すことはできませんでした。

でも、先生は、私にウソをついてまで、あなたを救けようとした。

あなたが大事だからです。……それが私と、あなたの違いだと思うんです。悔しい、ですけど。

「……えっ」気がつくと、セリナの膝には水滴が落ちていく。

「……あれ、おかしいな、なんで涙が出るんだろ」不思議だな、といいつつその子は続けた。

「……お願いです。私よりも可能性があるなら……先生を、癒してあげてください。」

私じゃ役不足だったから。私ひとりじゃ、先生の身体も満足に癒せないから。

だから、心だけでも、お願いします。

そう、懇願するように、呟いていた。

「あなたは……ミサキちゃんのこと知ってるの？」

「……先生から聞きました。でもあの人も、先生を救けようとして必死に戦ってます。」

主人を護る猟犬として、自分を救ってくれた先生に対して自分の役割を果たそうと、必死に。

先生に対しては、みんながみんな、役割を果たそうとしていると思うんです。

だから、聖園ミカさん。あなたにも、必ず役割があるはず。

先生はそう思ったから、あなたを庇ってウソをついたんじゃないですか？

私にはそう思ったんです、だからどうか。セリナはそう言って、点滴を替えに行った。

「……先生。私、どうすればいいのかな」

宵闇が覆う救護室に、私と先生だけが残された。私は、どうするべきなのだろう。そう逡巡した。

人は、傷だけを治して終わりじゃないです。

全ての患者さんは――その傷と向き合うように、なる必要があるんだと思うんです。

セリナの言葉が自分の中で反芻する。

今、先生は自分の付けた傷と向き合っているか。∴向き合っていない、と思った。老化という自分の付けた傷に対処できず、蝕まれていると思うしかなかった。

なぜ、そうなったのか。そこまでする必要があったのか。私には何もわからない。……私の役割が、先生が逃げてきたことから向き合わせることだとするのなら？  
その考えが私の頭をよぎった。

そう、少なくとも伝えなきゃいけないことがある。先生に。私はそう信じていた。

もう一度、私も先生と向き合わなければならない。そう意を決して、ベッドに横たわる先生を見た。

今、何時だ。

私は、トリニティの医務室で目が覚めた。

暖かい、掌の感触がする。…これは何だ。…それと羽の甘い香り。

「ん……」私は、身体を起こそうとし、全体を確認する。

「先生？……よかった、気が付いたんだね！」

「…ミカ」

視界に、彼女が見えた。ミカが、私の手を握って付きっ切りで見えてくれたらしい。

ふと確認すると、時計は3時を回っていた。

「セリナは」

「そこにいるよ。私が交代で見てるからって、言ったの」視界の端に、パイプ椅子に座ってうつらうつらしているセリナがいた。……セリナも寝ていないだろうに。悪い事をしてしま



った。

「……すまない」私はミカと繋いだ手とは、もう一方の手で頭を抱える。

「…先生、謝らないで。ううん、寧ろ謝るのは私の方」ミカは、両手の中の掌をギュ、と握った。

わたしこそ、ごめんなさい。「悪い子」になって、先生の事を何も聞かないで。

……こんなことになって。

「…過ぎたことはない」と、言うしかなかった。

元はと言えば、私の煮え切らない態度もいけなかった。

初めから真実を喋っていれば、あの電話を折り返せば、あんなことにはならなかったろう。ミカに心配をかけて、セリナに負担をかけて。

ミカはあと少し、朝までここにいたら、退学になるかもしれないのに。

それは私の本意ではなかった……私は、どうするべきなのだろうか。再び、天を仰ぐことにした。

ミカを寮に帰さなければ。

そう思い、忠告の口を開こうとする。

「――あのね、先生」

聞いてほしい事がある。そうミカは意を決して、言った。

「何だい、ミカ」

「死んでいい事なんかないよ」

発せられた言葉は、意外なものだった。

「そうなる運命だった、って言い方はおかしいけど。……あなたがアリウス達の為に、死んでいい理由はない」ミカはそう言った。

「……ミカ、私は」

「……あなたがアリウスの代わりに、断罪を受ける必要はなかった」

「違う」

「あなたが身代りになんて、なる必要なかった……！」

「違うんだ、ミカ。」

「わたしはどんな手段を使っても、あなたに生きていて欲しかった……！それだけ、だよ……」

……！」ミカは泣き崩れそうになるのを、必死に堪えていた。

「あなたの心も、身体も、あなただけのもの。戒野ミサキのものじゃない、それだけは……！」

「そうじゃない……私は、痛かったんだ。ずっと。」

私はようやく、その重い口を開いた。

「あの時の痛みは、ミサキだったんだ。だから私は、「大人のカード」を使うに至った」

……すまなかった、ミカ。私は痛みを持っていた。

特に「何かを感じることがない」という、心の痛みを。大人としての責務だと勘違いしてたけど、違ったんだ。今まで、私は極力生徒に公平に接しようとしていた。……それは、自己防衛もあつたけど、そこまで心を動かす何かに出逢えなかったからだ。でも、あの時私は、何かを感じることができたんだ。

あの雨の日に、ミサキと出逢ってから。ようやく、私の心は動いた。

先生は、ようやくそのことを話した。

「……聴かせて、先生。あなたが「そうだった」理由を。傍にいますから」

「…そうだな、私は君を「お姫様」だと言った。その時も、「何か」を感じたのかもしれない。」

そうか、ようやく分かった。

私はあの教会で、ミカの「痛み」を。

あの雨の日に、ミサキの「痛み」に感応したんだ。

人の「痛み」こそが、私の感じたかった「何か」だったんだ。

「……私は、今まで人に好意を持ったことなどなかった。」

だけど、ミカにはあの教会で。

ミサキにはあの雨の日に、ようやく好意を、持つことが出来たのだろう。

「……ミカ。よければ聞いてくれるかい。」

空っぽの男、空虚な大人が抱えている物と、その旅路、そして末路を。

私は今ここに至り、ようやくミカに心を赦すことができたような気がした。



## Ⅱ. 勝利への讃歌 *Here's to you*

私が彼女と出逢い、その「痛み」に呼応した日。それは、激しい雨の日だった。

「……なに」

「……ミサキ？」

私は傘を指しながら歩いていた。

補習授業部のお守りを済ませたトリニティからシャールへの帰り道、シャールが目前にある路地の片隅で私は印象的なロケットランチャーの鉄棒、その角の部分を見掛けた。

私の生徒の一人、戒野ミサキがシャッター街のアーケードの片隅に隠れるようにして座り、雨宿りをしていた。

「……い、いや……」あれから心配はしていた。だが、実際に会うとどうしたものかと、私は一旦目を逸らしてしまう。

「……見世物じゃない。その気がないなら……私を見ないで」

「……”その気”？」

あ、と私は目の前のミサキの真意に気づいた。

お尋ね者であるミサキが、よりにもよって連邦生徒会の目の前にいる理由は一つしかなかった。

「…ひょっとして、私を頼りに、会いに来てくれたの？」

「……。」ミサキは目を逸らしたが、どうやら当たりだろう。

よかった、と私は言ったが、心配してたんだよ、とは言わなかった。

私は”大人”であるベアトリーチェに搾取されたものとしてアリウススクワッドを心配しており、まだその決着は着いていないと思っていたからだ。

「さ、何ならシャーレに上がってよ、中の人達には私から話すから……」

「……大丈夫、夫」ミサキは立ち上がり、ふらつとよろける。

「……おっ、と……！」明らかに大丈夫ではない。私は慌ててミサキを、支えようとする。

——軽い。確かにそう感じた。

「……いつから、待ってたの」私はミサキに問う。ミサキは明らかに、憔悴し、衰弱しきつていた。

「……先生、あの時、言ってたよね」……ミサキは口を開ける。

“大人の私が保証するよ——その答えは、必ず見つけられる”って。

でも、私は……もう、疲れた。だから、……死に場所を、探していたんだ。

リーダーが抜けた穴を埋めようとして、残りの食料も、ヒヨリと姫に渡しちゃった。……

所詮、無理だったんだ。

「……ミサキ」

そっか、と言いかけたところで、違和感に気づく。私は疑問が残っていた。

何故ミサキは、そんな事を私に打ち明ける？

わざわざシャーレの目の前で、私を待っていないなら？

“ちゃんと見守ってくれる人もいるし……そうでしょう？”

“……先生、ですネ。”



答えは、決まっていた。……大人である私に、助けを求めに来てくれたんだ。

胸の奥がズキン、と痛むのを感じた。

これは、何の痛みなんだろう。

……先生には、関係ないのにね。

ふらふらと、ミサキはずぶ濡れになることもお構いなく去ろうとする。

「ミサキ、…何処へ、行くの」まだ話は終わってないよ、とも続けた。

ミサキは言葉を振り絞るように、言葉を外に放った。

もう……いいんだ。希望を持つとうとしてやってきたけど、それもここまで。

だから、一人で………死のうかな、って。

ミサキの頬がしつとりと朱くなり、発熱しているかのような息遣いになっているのは、衰弱だけのせいではないと感じた。

彼女の体温が、低くなるのを感じる。もう、ミサキは限界なのだとは私は悟った。ミサキは離れていく。大人として、ミサキを帰すわけにはいかなかった。

私は思い至る。なぜ、こうなったのか、と。

少し逡巡し——ああ、なんだ。成程、簡単なことだ。

あの時私は、どうしようもなく間違えたのかもしれない。その残酷な可能性に気づいた。

「……ミサキ」

私はミサキに、声を掛けた。

「な、に？先せ……わっ」

降りしきる雨の中、私はその傘すら投げ出し雨曝しになったミサキを抱きしめた。

生徒が雨に濡れ苦しんでいるのに、自分だけのうのうと傘を差してなるものか。……私は、皮肉にもミサキに傘を与えようとはせず、あろうことかその朱い顔と熱を彼女と共有することを望んだのだ。今考えてもおこがましいと思う。

そして、ただでさえ碌でもない私は言葉を絞りだすように言った。

「ごめん、私は、君たちに路を示したつもりでいたんだ。

それなのに、ただそこにある君たちの生き方を、干渉するのが悪い事だと思って、見ないふりをしようとした……!!」

だから、本当に、ごめん。

これは誰が喋っているんだろう。私だけじゃないかもしれない、と感じた。

私の中にある”何か”が、そう喋っているような気がしたんだ。

彼女のしっとりとした湿度と息、そしてミサキが今まで付けていた傷に呼応するかのように、

私の抱きしめる腕は強くなった。

「……せん、せい」

「ミサキ、相談しに来てくれたんだよね。助けてって、言いに来てくれたんだよね」

「…別に、そんなつもりじゃ」

「だとしても、気付かなくてごめん……！」

ミサキ、私は君を、無視しようとした。

気付かずに、その命を、無視して消そうとしたんだ。

だから本当にごめん。……その償いは必ずするよ。私は、そう誓った。

……変な人、とミサキは呟いた。

「……うん、それでいい、先生がいいならいいよ」

あったかい、それで十分だから。とミサキは言った。

ありがとう、ここで私を見つけてくれて。

ミサキは腕を振りほどき、ずぶ濡れになりながら家路を辿ろうとする。

だが……さらにふらついてしまった。……このまま帰るのは無理だろう。

気付けば私も濡れており、その水滴をミサキと共有したみたいで、私は何だか誇らしいような、恥ずかしいような気分になった。私はミサキを宿泊施設に連れていき、ありったけの食料と衣類を渡した。

ミサキはただ、濡れたベッドの上で……ありがとう、と。ただそれだけ感謝していた。

そしてモモトークの交換をして、私達は別れた。

あれから何度か、モモトークのやり取りや直接会うことを繰り返して。

一先ずは、アリウススクワッド達の身柄を保護できないか。私とミサキは、その計略を練っていた。

アリウスとトリニティ、ゲヘナとの融和。

私はそのビジョンを考えることが多くなった。

暗くて憂鬱なお話は、私も望むべきものじゃなかった。

…友情で苦難を乗り越え、努力がきちんと報われて、辛いことは慰める。

苦しい事があっても、誰もが最後は、笑顔になれるような。

そんなハッピーエンドを望むべく、私は努力しようとした。

……でも、どうすればいいのだろう。

ユウカに一度相談してみた。「アリウス達がハッピーエンドを迎えるには、どうすればいいのだろう」と。

話を聞いたユウカも、その意図は理解してくれていたが、「……難しいですね」と言ってしまった。

「…私がこれから言うのは、あくまで一般論ですが……ゲヘナとトリニティ、そしてアリウス。この膠着状態と遺恨は、互いが互いに不幸を押し付けるようにして構成されている、謂わば文脈だと思われます」

そしてその不幸は、今アリウススクワッド達に無理やり押し付けさせられている状態です。

……まずは証明、が必要だと思えます。スクワッド達が、無理やり徴兵され否応なく戦わされた背景を証明することが。ユウカはそう、頑なに答えた。

「…クロノススクールに助力してもらって、報道特集を組んでもらうというのは？」私は顎を摘んだ。

「……確かにいい案ではあります。ですが、クロノスもゲヘナとトリニティの互いのスポンサー料、視聴者である市民の視聴料で収益を得ている、いわばそれぞれの投資の上での均衡状態に成り立っています。…しかも昨今の傾向として、必ずゲヘナとトリニティを煽ってくると思います。…あまり得策ではないかと」

「……ふむ、ありがとう」話は振出しに戻った。確かに危ない綱渡りであるとは私も感じた。

世の中は3か月経った今でも、まだエデン条約事件の対応に追われている。今リンちゃんや生徒会にスクワッドの保護について話すのは、得策ではないと感じている。

だが、スクワッドの問題は日に日に深刻さを増しているようだった。

聞けば、あれからヴァルキューレによるスクワッド達の隠れ家一帯の弾圧が厳しくなったらしい……あまり時間はない。ひよっとしたら、何か犠牲を出さない限り、この問題は解決できないかもしれない。

そう思っていた矢先、メールの通知が届いた。

「……ヴァルキューレ？カンナかな」

送り主はカンナだった。先程上層部が確保した被疑者が、先生に「面会を希望している。だが、依然として上から面会の許可が出ない。……事も事なので、取り敢えず内密にして来てくれないか。」という物だった。

「……被疑者？」犯罪を犯した生徒となると、その数は極端に限られる。何やら悪い予感がする。……その意思を押さえつけるかのように、私は被疑者の名前に目を通した。

「……ミサキ」

私は眼を疑った。有り得ない、と思うしかなかった。

捕まった被疑者は、ミサキだった。

私は大急ぎで、シャーレを後にした。

「……先生、来てくれたんだ。」ミサキは私を見て、いくらか安堵したようだった。

「ヒヨリとアツコは」「……無事だよ。私が囹になって、逃がした」

「……頑張ったね、ミサキ」



ミサキは顔や腕、至る所に痣や腫れ痕があった。

……どうなってるんだ。私は傍にいたカンナに聞いたが、不明です、とカンナは動揺を隠しきれずに答えた。

「上からは、「抵抗した時に出来た傷」だとしか説明されませんでした……これは、尋問の痕、だと思います」

本来なら、重要参考人である為（あるいは、暴行の事実を隠すためか）面会すら許可されていなかった。

私は昼間にヴァルキューレ署内で門前払いを食らい、夜になってようやくその事を知ったカンナに連れられ、今ここで面会できている。

「奴等、カイザーPMCの装備とアンドロイドを借りてた。……悔しいけど、私一人じゃ歯が立たなかった」

「カイザーの装備を……!？」おかしい、と私は思った。

以前にも、こんな事があった。……ヴァルキューレがカイザーと癒着し、再開発の為に浮浪

者を無理やり排除しようとした一件だ。

どうもそれと似た匂いを私は感じていたが、……何のために。

私はまだ疑念を口には出来なかった。

先生、聞いて、とミサキは言う。

「奴ら、仲間の潜伏場所を教えろって、そう何度も脅されたけど私は口を割らなかった。……司法取引の機会はもう既に済んだ。……私はヘイローを破壊されるかもしれない。……もう会えるのも、これが最後になるかも」

「馬鹿な……！」いくら何でも早すぎる、と思った。……こんな事、あつていいはずがない。ヴァルキューレは、そうまでして早急にミサキを処分したいのか。

「……落ち込まないで、仮に私が死んでも、それはあなたのせいじゃない。」そう、焦る私を慈しむように、ミサキは続けた。伝えなきゃいけないことがある、と。

「先生、頼みがある。——次に狙われるのは、ヒヨリとアツコ。もしかしたらリーダーかもしれない。だから」

私よりも、他の全てのアリウス生達を、助けてあげて。

私はこうなることぐらいは、覚悟、していたから。

……そう言うミサキの眼には、悔し涙のような感情の結晶が眼に留まっていた。

……でも、貴方に会えなくなるのは、寂しいな。

ぼろぼろと、ガラス越しの机に水滴が流れ続ける。

…何でだろ。こんな事言うはずなかったのに。

最後くらい、笑って別れさせてほしかったのに。

「先生。——これから先、どうなっても、それは貴方のせいじゃない。

……自分を責めないで、あの雨の日、私をあの時見つけてくれて、ありがとう。」

だから、どうか。こんな思いをするのは、私で最後にして。

ミサキは私に、そう告げていた。

「待ってよ、ミサキ……!!」なぜ、どうしてこうなるんだ。

私は、何も間違ったことをしたとは思っていなかった。

なのになぜ、こんなことになるんだ。私は、何もできないのか。

「……先生、そろそろ巡回が来ます、…後始末は私がします、今は離れないと……!!」

「そういうわけ。……さよなら」

「……ミサキ……!!」

私はカンナに連れられる。カンナも、無理してここに連れてきてくれたのだろう。

だけど、それでも尚。――放してくれ。目の前の光景を前にして、そう思わずにはいられな

かった。

でも、どうか、行かないで。私を一人にしないで。幻視だろうか。ミサキは最期、そう口元を動かしたのが確かに視えた。

私に漂うのは、無力さとやるせなさ。そして、ただどうしようもない怒りだった。

……私は思い返す。

幼子の頃から利用され、地を這う生活を強制させられ。

命令され、従わされた罪の為に、償いの為に人生を失う。

彼女が今を必死に生きようとするほど、未来は遠くなっていた。

そして、その果てに、ただの他人が起こした独善によって、彼女は途方もない付けを払わさなければならない。

それが戒野ミサキという、たった一人の少女の人生とでもいうべき文脈だった。

大人である私なら、知りえた光景だ。——だが、そんなの残酷すぎるじゃないか。

私が相対し、憎んだのは——この世界の理不尽さに対してだった。

時刻は、夜の一時を回っていた。：メールが届く。

私はそのメールに返信し、機が来るのを待ちつづけ、シャーレ構内を移動した。

「……聞こえているかい？」

「シッテムの箱の電源は？」

「切ってきたよ。お望み通りに」

午前三時。私は防衛室に居た。

そこには、私を呼び出した張本人である防衛室長がいた。

つまるところ、今回の黒幕は彼女なんだろう。

「連邦生徒会の前で、あの抱擁。……素敵ですね、見せつけのつもりでしょうか？」

防衛室長、▲▲が暗闇の中、モニターを操作し、私とミサキのあの雨の日を映し出す。

「……要件だけ聞こう。目的は何だい、▲▲。」

「…再開発の一件で確信しました、先生、私たちにとってあなたが一番の脅威となると。…

…先生は生徒を見捨てない。あなたは、そうですね？」

「……ああ、勿論、君もね。」

「再度、状況を説明しましょうか。……彼女は既に防衛室管轄でありながら、カイザーの自

治区：対テロリズム容疑者用のブラック・サイトへ移送しました。裁判はまだですが、監置中の「事故」は防ぎようがありません。そうでしょう？」

「……」。私はぎり、と歯噛みする。

「私達の目的については：改めてお話いたします。近々私の方からリン行政官に”お渡し”するこの改革案は、その序幕にすぎません。」

ただ、その前に先生の方に予めサインをお願いしたいのです。そうすればリン行政官もきつと”納得”していただけるでしょうから。

……それだけで彼女の身柄は保証します。▲▲は一枚の書類を渡す。

…大人の話をしましょう、何もかも私に任せて——彼女と添い遂げる道を選んでもいいじゃないですか。

「…目的はこれかい、▲▲」

「ええ。せっかく”餌”が手に入ったんですもの。私の新世界に移行する前に、あなたの権力を完全に消し去ることにしました。ただそれだけです。」

「私そのものをこの世から消し去りたい、の間違いじゃなくて？」私は肩をすくめた。「……」

立場を分かってないようですね」彼女は指をパチン、と鳴らす。

そこには、とある部屋のライブ映像があった。ただ、特殊なワイヤーで括られた縄がポツンと置いてあるだけの。

「……!!」

「私の権限一つで、あの子を絞首台に送ることだってできます。失言一つで、そうはなりたくないでしょう?……先生?」

防衛室長は愉悦を噛みしめるように、立ち上がり私を見下した。

私は、座ったまま彼女を見上げるしかない。

「……わかったよ」……こうなつては致し方ない。私はペンを取る。

「…やけに素直ですね。そんなに彼女が大事ですか?」「ああ、とつても」

「…なら、一刻も早く彼女を救いたいでしょう? 渋ると尋問が長引きますよ。それでは……」

「…なんて云うと思つたか?」私はペンを捨てる。

「は?」防衛室長は目を丸くする。

「甘いよ。」切り札」を切らせてもらう。」彼女はまだ大人ではない。だから詰めが甘い。



覚悟はとうの昔にできていた。ベアトリーチェが相手なら、こんな風にはならなかっただろう。

「…負けを認めるよ、確かに君は優秀だ。…だが、君のしやうとしている事を黙って見過ごす気もない。『こうせざるを得なかったんだ』  
大人のカードを出す。

…認めよう。黒服、私はお前と同じだ。

「阻止させてもらうよ。——私の生に代えても」  
この時点で、私に勝利はない。

だが、未来を夢見ることは出来る。

願わくば、あの子が笑って生きられる、未来を。

自分が生きててもいいんだって、心から思える未来を、私は望んだ。

絞首台の画面、そしてサブモニターでミサキと私を映していた思い出の画面に、ザッ、とノイズが走った。

「…何をしたんですか!？」「さあ。自分で確認してみたらどうだ。」

「……まさか!」防衛室長はリモコンを操作する。

ノイズ。ノイズ。ノイズ。どれもノイズが映っていた。

そう。防衛室長がこれまで集めたアリウススクワッド達の証拠映像。その全てが消え失せ、ノイズと化したのだ。

「私は何も操作してないよ。それじゃ」

「……待ちなさい。このままで済むと思ってるんですか?」

……準備を始めてください、と……▲は指示を出す。

ライブ映像の向こうでは、何やら物音が聴こえた。

とてもよくない、物音が。

「……そうか」「あなたの身柄を一時的に確保します。クーデターが済むまで大人しく——」

「……ところで、こんな時計あったっけ？」

「……！！」まさか、と▲▲は振り返った。

そこには、時計があった。ヴェリタスのあの子から私にプレゼントされ、返した時計が。

ガアンと、防衛室長は傍に置いていたデリンジャーの弾丸を放った。時計は破壊される……が。「無駄だよ。音声データは私の物だ」

「……一体あれは」

「クーリングオフしたものだ。勘づいていたので、偶然通話を盗聴していたコタ：ヴェリタスに、ね。：最近の時計は凄いいね。自走機能や扉のロック解除機能、通風口への潜入機能もあるらしい」

絞首刑を中止しろ。私はそう呟いた。

「…中止してください、被疑者はそのまま、房に戻して。」▲▲は言う通りにした。

…くっ、と▲▲は私を睨み付ける。

「確かに『システムの箱の電源』は切ったよ。目に見える事が、真実とは思わない事だ。大人は狡いんだよ。——ごめんね」

「待ちなさい。……このまま帰すとしても？」

防衛室長はそのままデリンジャーを構える。ここは既に包囲しています。そうも言ったが、私は意に返さない。

撃てないはずだ。彼女が今ここで、自分で手を汚すことは愚にも等しいことだと分かっているからだ。何より、彼女は大人じゃない。私の生徒だ。いずれお灸を据える日も来るだろう。

「心配しなくても、私はもうすぐ去る。元凶は全て消えるようになってるんだ」

私は遠慮せず、机に置いた『システムの箱』に近づく。

「……くそっ……っ！！」

彼女は、引き金を引いた。…まずい。誤算だった。彼女は”大人”じゃなかった、という事だ。

「……先生っ！もう、いきなり電源を切ったかと思えばっ」

「……な……！！」

よかった。間に合ったようだ。幸い、大事には至らなかった。

こんな事であろうかと、私はあらかじめアロナに再起動タイマーの機能を頼んでおいたからだ。  
リブート

「ああ、ごめんアロナ。…ここを開けてくれるかい？」

「…先生、首尾は」

私は防衛室を去って廊下に出る。振り向くと、そこにはサオリがいた。

「何とかなったよ、帰してもらえた。…こっちこそこんな事、背負わせてごめん」

「気にするな。狐の説得には、成功した。奴等も『本番』の前に、人手不足になる事態は避けたい筈だからな。アツコが主導権を握り、ヒヨリが私たちの離脱までマークを付けている。」

「さすが。まるで伝説の「フォックスハウンド部隊」だ」

「…私達は、猟犬だからな」

「でも、もう、そうじゃなくなる。…サオリ、巻き込んでごめんね。これで最後だ。」

「…ああ」

「さあ、——ミサキを迎えに行こう。「おかえり」って言って。「ただいま」って言わせてあげよう！」

連邦生徒会 S. C. H. A. L. E は、次の声明を発表した。

クロノススクールと共に損壊した証拠データの調査が終了。データの損壊に第三者の介入は見受けられず、捜査を打ち切りとする。

錠前サオリ。

秤アツコ。

戒野ミサキ。

槌永ヒヨリ。

彼女らを証拠不十分で不起訴とする方針で一致。その五日後、シャーレの「先生」が、突如急変した様態を理由に近いうちに辞任する意向を表明した。

また、「先生」は、彼女達をあらぬ憶測や中傷から保護する目的で、彼女等の身柄を暫定的に

シャーレでしばらくの間保護、後見人となる見解を発表した。

一定期間の保護の後、社会再統合に向けて動く予定だが、彼女達は許されるならばこのままシャーレで運用されることを望んでいると、後に関係者への取材で明らかになる。

「…これがあなたの本意ですか、先生？」

早朝の執務室で、私は突如現れた黒服に詰られていた。

「…まあね」

覚悟はしていたが、私は、ただそう言うしかなかった。

「スクワッドの受け入れの件に関しては、リンちゃんにかなり無理をしてもらったよ。……  
買ってきたんだ。一服、吸うかい？」

「……いいでしょう。どうせ、最後になるかもしれませんし」  
黒服はそれを、一つ摘んだ。煙が、執務室の内に充たされる。

「貴方は、その任された権限を超えてまで、世界を書き換えた。貴方の起こしたそれは、世

界に人為的に発生した歪みにも等しい。…これでは我々も暫くは様子見です。あなたが起こ

した歪みによる世界への在り方<sup>しんぴ</sup>に対して、ね」

黒服はそう言って、続ける。

「私の言ってる事が解りますか？……もうチップは残っていないのでは、と言っているのです」

あなたは今まで、生徒を守るためによく頑張りました。

だが、もう認めざるを得まい？

あなたは、私と同じになった。もうゲームオーバーですよ、先生？

黒服はそう、高らかに宣言する。

「まだだよ。黒服、まだ終わってない。<sup>it's not over yet</sup>」



「…今、何と？」黒服は首を傾げる。

「私はあなたと同じではない、と言ったんだ。」

私は堂々と返すように宣言した。たとえ斃れても、後を託せる人がいるからね、と。その瞬間、執務室の扉が開けられる。入ってきたのは、蒼髪の少女だった。

「…先生、その人は」

「……知り合いだよ。古い知り合いだ」

「……そういうことですか。確かに。あなたの勝ちだ」

「いいでしょう。私はあなたを忘れない。

その苦しみが、あなたへの勝利となることを祈って。」

黒服は言い残し、去ろうとする。

黒服のシルエットと、少女の肩が重なる時、彼は呟いた。

「同じ土俵に上がってきなさい。楽しみにしていますよ、あなたと対決する日を。『先生』？」

彼はそう語り掛け、姿を消していった。

「…今のは」

「気にすることは無い。君にはまだ猶予がある」

私は少女に向き直り、言葉を告げた。

「ようこそ。…改めて君たちの身柄と居場所は、今からシャーレにある。君達をよく思わない過激派などもいるだろう。…彼らには、私が面と向かって向き合うつもりだ」

私は今から君達の世界への信用を取り戻すことに余生を使うことにするよ。じきに皆気が付くだろう、君がいい先生になることを。

「…はい。」

「君にはまだ時間がある。君はまだ、私の管轄としてゆっくりと大人になっていけばいい。楽しみにしてるよ、錠前サオリ先生。」

「わかった。…ありがとう、先生。私に役割を与えてくれて。」

その少女、錠前サオリは、感慨深いような目線をして言った。

その直後、さらに人が入ってくる。

「やあ。ヒヨリに——ミサキ。」

「……。」ミサキは私をじっと眺め。

「あ、あわわ……。」ヒヨリはどこか落ち着かない様子で私とミサキを交互に視た。

「……どういうつもりなの、先生？サオリを後任にするとか」

「……何か不満かな」

サオリを、地獄に引き摺り込むつもり？

「……。」「ミ、ミサキさん……。」

「確かに。言い方によつては、そうかもしれない」私は努めて冷静に返す。

「……こ、これからも、私達は辛くて苦しいことばかりなのでしょう……。」

「見方によつてはね」「先生……！」ミサキがつかつかと私に歩み寄る。

「……ミサキ！」それを、サオリが腕で制した。

「全て私が望んだことだ。私の贖罪のために、先生は助力してくれた。」

「いいから。なら、せめて私にも贖罪をさせて。まだ私は、あなたにありがとうも言っていない」

ミサキはサオリの引いた一線を越え、デスクに座る私の前に立った。

そして、私にある物を渡した。……これは、アリウススクワッドのドッグタグだ。しかも全員分の。

「先生、あなたがリードを持って。私は今から、あなたの猟犬になる。命令されれば、何だってする。これは鎖。わかる、先生？」

今から、私の心も、身体も、あなたの物となるんだよ、先生？

ストランド

ここにあるのは、あなたと私を繋げる鎖。……だから、あなたが死ぬ時まで、傍にいますから。よろしくね、先生。

ミサキはそう、誇るように宣言した。私はその意思に、応えようとする。

「……解った。よろしくね、ミサキ」

「……ミサキ……。」

「……いいですねえ、こういうの……。」

「……うん、これで全員揃ったね、先生。」

遅れて来たアツコが、ひょこつと顔を出し、宣言する。おそらくさっきの会話も聞いていたのだろう。

「これから私達は貴方を救ける目と耳になり、手足、そして銃になる。——これから私達は、貴方に忠誠を誓います。何なりと命令してください、先生。」

「——忠誠なんて、誓わなくていいよ。私は君たちの「先生」なんだから」  
そう、私は笑いながら応えた。

「——これが、私の全てだ」

そして、物語は現在に戻る。

私は傍で、ずっと先生の話を聞いていた。時刻は、午前4時15分を回っていた。

「聞いてくれて、ありがとう。ミカ」

「…うん。いいよ、先生」

私はこう感じた。

その選択は理解できる。その行動自体は、正しかったのかもしれない。でも、どこか歪いびつだと。

先生は確かに、命を呈して何かを守ったのだろう。

…でもそれにはどこか形容しがたい歪さがあり、それぞれのエゴが見え隠れしていたと、思った。

聞き方によっては美しくも聞こえただろう。物語の登場人物の皆は、それぞれの遺志をかけて動いたのだろう。——でもその信念は、どこかそれぞれ勝手な思いの押し付け合いだとも私は感じた。

…やっぱ私、悪い子だ。こんな考えしかできないなんて。そう思い込み、へこんだ。

と、そう考えた時、足音がした。私達だけではない、第三者の足音が。

「……っ？」

「やっぱり、ここにいた」

「——ミサキ」

そこには、戒野ミサキがいた。

「……」私は思わず、先生の掌を握っていた手を放した。

何でだろ。……堂々としてればいいのに。そう思ったけど、できなかった。

「探しに来てくれたんだ」と先生は言った。

「…当たり前でしょ。あっちこっち探したけどいなかったから、注射のスペアがあるからここかな、って」

「そうか、ありがとう」

「——探したよ、先生。さあ、帰ろう」

「…同棲してるの？」私は思わず聞き返した。

「一週間だけだ。ミサキがどうしても、って言うから」

「……そつ、か」

「…あんまり帰れてなくて、ごめん」

「いいよ。どうせ何かあったんでしょ。…聞かないでおくから」

私は安堵したけど、どこか靄がかかったような気持ちになった。先生には、ちゃんと帰るべきところがあるんだ。——だけど。これで本当にいいのか。

「待ってよ」

だからと言って、このままにしていいいわけじゃない。

「なに……？」

戒野ミサキは不機嫌そうでこそなかったが、不思議そうな目をして私を見つめる。私——聖園ミカは、先生の話を聞いて、この少女を責めることはできなかった。

だけど。

「戒野ミサキ。私はあなたを許さない」私はミサキにそう告げた。

「……え」



「仕方なかったとは思。——それでも、先生の生命を、未来を奪ったあなたを私は許さない」

僅かな沈黙があつた。

まるでこの、温かつた空気を殺していくような沈黙が。

それでも私はこれを、嫌われても言うべきだと思つたから言つたんだ。自分の選択に、悔いはなかった。

「……別に、私は先生に頼んでない」

「……」一瞬、度し難いような感情が私を包んだ。

——だけど、その憤怒は、あつさりと冷えてしまった。

「私だって、頼んでない。頼んでないのに、なんでっ……………!!」

ミサキの頬からぼろぼろと、涙が零れ落ちる。

ミサキの涙が、私の怒りそのものを凍らせる。

——後悔してたんだ。ミサキはずっと、先生にあの選択をさせたことを。

私は彼女に、それ以上何を言うことも出来なかった。

ミサキの涙が、私を尖った針のように突き刺していく。

やめてくれ、ミサキ。

私は君に、そんな顔をさせたかった訳じゃない。

そんな顔をさせるために、大人のカードを使ったわけじゃないんだ。

「……先生、話したの、……あの事を」

「……ああ」

キツと、涙目になりながらミカを睨む。

「あれは。あの想いは私のもの。……あなたが介入<sup>はい</sup>っていいことじゃない。」

「…ごめん」

ミサキは感情のままに、ミカを攻撃した。…私はミカを庇おうとする。

「…私が話したんだ。ミカが何かできることは無いかって言ったから」

「…私じゃ、役不足ってこと？」

「そういう事じゃ…!!」

この時、私は思った。

なぜこうなる。…そういうえば、あの後ミサキが捕らえられたのは——そもそも私がいたせいだと。

ひよつとして、私がいる限り、争いがなくならないんじゃないかと。

私の行動のせいで、争いが起こり、互いが不快になる。

私は残り火だ。もうそれを、鎮める力も残っちゃいない。

「いいよ。そんなに聖園ミカがいいなら、二人でいつまでも幸せにやってくればいい。……さ  
よなら」

「……ミサキっ……!!」

「……あなた、本当にそうなの？」

ミサキは去ろうとするが、ミカの言葉が止めた。

「先生はあなたを幸せにしたかったから、命を使つたんだよ?……あなたも先生と幸せになり  
たかったから、猟犬になる事を望んだんじゃないの?…それなのに、こんな私なんかのた  
めに、全てを投げ出す気？」

やめてくれ。こんなものが見たかった訳じゃない。

私は決して、二人が、罵り合う様を見たかった訳じゃないんだ。

「っ……………!私だってこんな事、望んでない……………!!」

私があの時、死ねば済む事だったのに、と。ミサキはそう言った。

例え強がりだとしても、そんな事を私は聞きたくなかった。

「……………ああ、そっか。あなたは、アリウスは、先生から貰った命さえも虚しいって言って切り捨てるんでしょ。」

おい、まさか。

やめろ。

「目を覚まして。あなたなんか、本当に……………！」

……………ミカ。「やめてくれ」

私はミカの腕を掴み、制する。

「お願いだ、やめてくれ。……もう、いいんだ」

「……………よくないよ、先生」

ミカは、今言ったことの感情を抑えられているのだろうか。私はそう思った。

「はっ……………先生……………」

セリナが起きてきた。彼女はただこの状況に、啞然とするしかなかった。

「…セリナ、すまない。…三人で話すことがある。少しの間、外してくれないか。」

「…はい」セリナはともに残念そうに、席を離れる。

その後ろ姿が本当に、寂しそうだった。すまない、こんなことになってしまった。助けてくれた君に、こんな仕打ちをしなければならいなんて。

…沈黙がづらい。私は重い口を開いた。

「ミカ、ミサキ。言わなきゃいけないことがある。」

「…なに」「……………先生……………」

「…私が消えるべきなんだ。私はここにいい存在じゃなかった。」

…あ、と二人は互いに自分がしたことの愚かさに気づいたようだった。

「……先生、そんなこと、ないよ」「…冗談でもそんな事、言わないで」

「…はい」

ああ。この時、私はすべてを諦めた。

私はもう、用済みだ。

せめてできるのは、これ以上彼女たちが傷つけないために消えることぐらいしか、思いつかなかった。

ミサキが医務室を出ていく。時計は4時40分、もうすぐ5時になる。職員が、それぞれの部屋を開錠しにくるだろう。……残念だが今校内を出れば、確実に彼らに見つかる。

「朝、来ちゃったね。私はこれで退学かな？」

「……。」

ミカが残念そうに言う。すまない、と私はただそれだけ言った。

ミカは特に悔しがる様子も無く、先生、と言って

「あなたは守ったつもりでも、私たちはあなたがいないきや意味ないの。あなたが欠けたら—

「その代わりは、誰にも勤まらない。みんな、あなたが大事なんだよ」

分かってくれる、先生？

そう言っ、ミカも医務室の外に出た。

医務室は、これで一人になった。私はただ、嘆くしかない。

もう、どうしようもなかったと感じる。仕方ない、私はミカとミサキを傷つけた。

私は覚悟を決めた。…甘んじて、罰を受けよう。

ごめんね、ミサキ、ミカ。

こんなことになって、すまない。

本当に、すまなかった。



### III. この世界に捧ぐ *News of the world*

朝になり、入ってきた職員に私は自首していた。

そして現在、私は反省室にいた。

そうなるてからの私の処遇は現在、審議中らしい。

先生は可能な限り取り合ってくれているらしいが、それでも悪くて留年は避けられないだろう、そう勝手に思った。

そうして処分が審議されつつ、三日ぐらい経った後、先生から手紙が届いた。：一体何だろう。

手紙の内容は、こうだった。

「ミカ、すまなかった。

君とミサキを傷つけた罪は、いくら謝罪しようと許されるものではないだろう。

私はもう、疲れた。甘んじて、断罪を受けよう。

それで許されるとは思っていない。

君が起こした事については、私が全責任を負おう。：望むならば、君が無事に卒業できることを、心から祈っている。

すまない。全てが終わったら、私のことは忘れてほしい」

「……まさか、ね」嫌な予感がした。

でも、先生に限って、そんな事はないだろう。そう思っていた。

「…私が消えるべきなんだ。私はここにいい存在じゃなかった。」

本当に、嫌なことしか連想しない。：私は書いている途中の反省文に戻った。

……そんな私の予感を裏付けるように、何やら校内は騒がしかった。

やがて、その騒がしさが大きくなってくる。：こっちに向かってきている。そう思った。

「…やめてください！面会は禁止されています！」「…離して」

小さな悲鳴と、人が倒れる音。：何やら騒がしい物音が、こちらを見据えて来ていた。

「…もう、一体なんなの……？」

「…やっぱり、ここにいた。あなたに用があるんだけど」

物音の正体は、ミサキだった。何やら青ざめつつも焦っており、表情には冷や汗が伝っている。

「…なに、一体？」

「先生が今朝から行方不明になった。補習授業部やシャーレの当番生徒達が必死で探してるけど、ゲヘナにもトリニティにも行っていない」

「…まさか…！」私の予感は、確信に変わった。

「…“まさか”？…お願い、何か知ってるなら教えてほしい」とミサキは言う。

状況は予断を許さないと分かった以上、情報を隠すことはできなかった。

私は扉の鍵を無理やり壊し、ミサキに、先生から送られた手紙を見せた。

「…先生」その内容を見て、ミサキは絶句していた。

…なんで。わたしのせいだ。そう言葉にならない言葉が発され、口が歪んで動くのが見える。

「…落ち着いて」私は動揺しているミサキの肩を、がし、と掴んだ。

「…うん」ミサキは深呼吸をする。よかった、一先ず落ち着いてくれたようだ、

「…先生の、行きそうな場所は分かる？」私はミサキに尋ねる。

「……分からない。一応あの時出逢ったシャーレの前とか、ゲヘナにトリニテイ、大体先生の行きそうな場所は探したけど見つからなかった」

先生は、何が目的で姿を消したんだろう。そうミサキは言っていた。

私は感じるしかなかった。あの手紙は……間違いなく、遺言のような何かだと。

「…考えないほうがいいかもしれない」私はミサキと一緒に反省室を出た。

廊下を出て、階段を下り始めたあたりで、その可能性を思いついた。

先生は、あの手紙の中で断罪、って言っていた。

まさか……。

私は思い至った。断罪。その言葉が指し示す座標を。

「……ミサキちゃん」私は階段を下りる足を止める。

「……何？」ミサキは、足を止めた私を不思議そうに見つめる。

「……前にアツコが生贄にされかけた場所、覚えてる？」と、私は呟いた。

「……アリス自治区」そう、ミサキは呟いた。

どういうこと、とミサキは私に問う。

私に浮かんでいたのは、最悪のシナリオだった。

「君が起こした事については、私が全責任を負おう」。この言葉の真意が、理解できてしまった。

「……先生は」

……先生は私が誘ったあの夜に、先生が私を襲ったということにして——自殺、する気なんじゃない。

断罪という言葉が指し示し、連想する場所と言えば、私は自治区の教会ぐらいいか思いつかなかった。

そこで先生が私の部屋に入ったことも、あの夜のことも、全部自分が起こしたことにして死ぬ気なんじゃ。……私はそう感じていた。

だとしたら、一刻も早く止めないと、取り返しがつかなくなる。

時間がない。私はその可能性を話し、——ミサキは、今までにないほど取り乱したように、吐き気を催したような顔をし、表情は生気を無くしていく。

まるで、以前の生に関心を持ってない、虚ろな自分に戻っていくように。

…こうなることは分かっていた。でも時間がない。今は耐えてもらうしか方法がなかった。

「落ち着いて。…ゆっくり息を吸って。…まだ、大丈夫だから」私はミサキを支えようとする。

「……先生は、あそこに向かったってこと？」

「私の予測が、正しければ」私は確信していた。

私達は、急ぐようにトリニティ地下のカタコンベへと向かった。

先生はアリウス自治区、あの教会へ行く道をたった一つしか知らないはずだ。

…私は思い出す。…何故あの時、先生とサオリを追ってアリウス自治区に向かったとき、既に塞がれた通路を辿って、スクワッドを追ってこれたのか？

そして何故、予知能力を失ったセイアちゃんや正義実現委員会、救護騎士団達は迷うことなくアリウス自治区に向かえたのか？……簡単なことで、私が無理やり塞がれた通路をこじ開

けて進んだからだ。先生やスクワッド達の足跡を頼りにして。

そういう訳なので、迷路のようなカタコンベはまっすぐと私が掘削した正解への道へ繋がっていた。

私は道を進みながら思ってしまう。……先生は、私達に止めてほしいんだろうか。

まだ、進んでいるこの先に先生がいるかどうか分からないのに、そんな事を考えてしまう。……それでも、答えは分かっていた。

ヒント

先生は、私達に助けを求めて「断罪」という言葉を使って手紙を送ってきたんだ。

どこかで聞いたことがある。……人は、死ぬと決めた時に本人はそう思っていないでも無意識下で助けを求めることがあると。つまり、それは先生が残した最後のSOS、私には、いや、——私達には、まだ先生を止める選択肢が残されている。確かにそう感じた。

私は、私達は、先生を何としても止めなければいけない。それが先生を傷つけた、私達の贖罪。

言葉には出さずとも、今、私とミサキの間には、そう感じられる確かな繋がりがあった。

だから、あともう少し。……待ってて、先生。

——もう、今までの私じゃないんだから。例えどんな残酷な真実だったとしても、私はそれを受け入れる。自分を捨てずに、あなたの本当に望むことを遂げてみせる。

私はこの言葉を、ようやく反芻することができた。



私はアリウス自治区の教会にいた。

私は教会のステンドグラスの下に跪き、これまでの事を思い返した。——いろんな戦いがあつた。それを上回るほどの、色んな出逢いも。

だけど、もうすぐそれも終わる。

「……先生、何を、する気ですか」タブレットの中のアロナが不安そうにそれを見つめる。アロナ。すまない、今まで私の我儘に付き合ってくれて。

私はアロナに心から感謝しつつ、以下の命令を伝えた。

「アロナ、……こんな私に、ここまで付いてきてくれてありがとう。……シッテムの箱の権限を私から錠前サオリに譲渡する。……おやすみ、アロナ。どうか目が覚めた時、私のことは忘れてほしい」

「……せんせつ……!!!」

本当に、ありがとう。私は最後にそう言って、シッテムの箱の電源を閉じた。

後の事はシッテムの箱の中のテキストファイルに納めてある。……私がミカを襲ったという「事実」も。三日かけてそれを、私がいなくなった後のマニュアルを用意した。

見たらダメだよ、とアロナには言い聞かせ、目を光らせておいたから見ることは無かっただろう。

さあ、いよいよ大詰めだ。私は持っていたベレッタに弾を込め、それを、跪きながら口腔へと捻じ込んだ。

できる事なら、手短に済ませたかった。

……あまりの静けさに、遠くに廃墟に響いた足音が聞こえる。一つ、二つ。

「……来てくれたのか。ミサキ、ミカ。すまない……。」

私はこの期に及んでも、私を信じてくれた二人に感謝した。だが、顔を合わせれば、私は二度と戻れなくなる。

生きたい。最期のくせにそう思ってしまったている自分が情けなかった。

だが、生きていれば、私をここまでさせた事に二人ともお互いがお互いを許せなくなるだろう。

そんな世界は望んじやいなかった。……君達のせいじゃない。ミカもミサキも悪くない。悪いのは私だ。……アロナ。私が死んだ後、頼むからこれを伝えてくれ。

私の遺志を。どうか、頼む。神様。

私はミカを傷つけた。

私にしか寄るべが無かったのに、私はそれすらも拒絶した。

私はミサキを傷付けた。

私が起こした代償を、結果として一生悔やませることになってしまったんだ。

あの時の自分の命を、天秤に掛けさせるまでに。

…私は、ミサキを受け入れる資格なんかなかったんだ。こんな事、先生失格だ。生きていれば、それだけで私は争いの種になる。誰も幸せになんかなれない。

何かを選ぶという事は、何かを放棄すると言う事。

何かを救うという事は、何かを地獄に落とすということ。

生きてる限り、私は選択し、取りこぼし続けるだろう。

…私はずべきじゃなかったんだ。

ケジメを付けろ。最後まで。

呪いのように溢れた言葉を最期に、私は引き金を引く事ができた。  
バァン、と言う破裂音が私の脳天に飛び散った。

その銃声は、残酷にも私達の目と鼻の先で響いてしまった。

…遅かったか、とミサキは零した。

「…え」どういうこと。その先を、私は聞けなかった。

ミサキが虚ろな眼をして立ち止まる。そして、私に言い聞かせた。

「……これから先は、覚悟が必要になる」

それでも、聖園ミカ。あなたは見るの？

戒野ミサキは私に、究極の二択を突き付けた。

「……っ」…私は見たくなかった。先生が破壊されて、変わり果てた姿なんて。

そんなものを見たら、私は壊れてしまう。…それは目の前のミサキも同じはずだ。  
それでも、狼狽える私にミサキは意を決して言った。

「私は見る。…例えそこにあるのが、赤い華でも」

覚悟は、とうにできているから。

そう断言できるミサキが、ちよつとだけかつこ良く、羨ましかった。

「ミカ。……あなたは行かないの？じゃあ、先生は永遠に私のものだね」

「……っ！ミサキ、ちゃん」

「…どうするの？ここまで来て、目を逸らすの？」

「……いやだ」

それは嫌だ。

それは嫌だった。

私は、それを拒んだ。

「私だって、先生の帰る場所になりたいんだから。…私にだって、先生を私のものにする事は…できるはず」

「…そう」ミサキは、極めて冷静に、それでも決意を持つ私に、微笑むように笑みを浮かべ

た。

私は、この子が笑ったのを、初めて見た気がする。

「…こうなったら、最期まで付き合うよ。ミサキちゃん」

「…そっか。じゃあ、行こう」ミサキは先導し、私はそれに続いた。

私達の心は一つだった。例えばそれが変わり果てていたとしても、先生を連れて帰る。

……できるなら、「おかえり」って言って、「ただいま」って言わせてみせる！

だから、どうか生きてて、先生！

一縷の望みを駆けて、私は跪く先生の人影へと向かっていった。

「……は、はあつ、はあ……………！」

私は自分自身に敗北した。私は最後の瞬間を迎えても尚、死ななかった。

脳天目掛けて引き金を引いても、なぜか弾は虚空に消えた。発射されたはずなのに、弾丸が出て来なかったのだ。

「……先生」

私を呼ぶ、聴き慣れた合成の声が聞こえる。

振り向くと、「シッテムの箱」の電源が付いていた。

……そこには、アロナが泣きじやくりながら私を見つめていた。

「……アロナ、どうして……？」

「……三十秒後に再起動タイマーをオンにしておきました」  
リフト

「……。」

シッテムの箱の電源を切ってから、もうそんなに経っていたのか。私は過呼吸をしながら、自分の迂闊さを呪った。

忘れていた。自分でつけた機能に仇を返されるとは。

「……君の主は私ではないはずだ」

「……まだです、忘れちゃいましたか？……承認するには、譲渡者の「生体」が必要です。サオリさんは、まだ指紋を認証していません。その段階では、貴方に権限があります。…先生。」

「……あ。」

何と言う事だろう。最後の最期にとんだ間抜けだ。

ここまで来るとそういうやこんな事前にもあったな、と自嘲したくなるくらいの大間抜けだった。

「……それに……ほら、来ましたよ、先生。」

先生として、勤めを果たしてください。

アロナは、そう言っていた。

「……先生っ……!!」

私の傍には、直ぐそこには、ミカとミサキが駆け寄っていた。

「……ばれちゃった、かあ……」私は放心したように、全てを投げ出した。

ミサキは私に縋り付き、ミカは私の握っていたベレッタを掌で包んだ。

「先生、貴方が死のうと思ったのは……あなたのせいじゃない。わたしが、わたしたちが、弱かったせいで……!!」

だから。本当に、ごめんねえ、先生………!!



ミカは私の掌の中の銃に対して、それを額に擦り付けるように謝っていた。

……生徒に謝らせるなんて、改めて私は教師失格だ、と改めて思った。

ミカ、それでも君は、私の為に泣いてくれるのか。……こんなクズ、謝る価値すらないというのに。

「ミカ、先生。……それを頂戴」私の肩に縋り付いて眼を潤わせていたミサキが、ミカと私の持っていた銃に対してクイ、と指を曲げる。

「……悪いけど、これはあげられないよ。私の物だ」「先せつ……!」

「……いいから。私の解答を聞いてからでも、死ぬのは遅くないでしょ?」

「……どういうこと、ミサキ?」私は問う。

「……それでも納得いかないなら、私も一緒に死んであげるから」

「ミサキちゃん……!?!」ミカは狼狽える。

「……それはダメだよ、ミサキ。私の目的は君たちを死なせる事じゃないんだ」

私はかぶりを振った。

「……じゃあ、先生。貴方の命を預けてみない?」「……ミサキ?」

私が、殺してあげるのも悪くないでしょ。ミサキはそう言つて、私に笑みを浮かべた。

「…ミサキちゃ、何を」…それもいい、かな」動揺するミカの横で、私は嗤っていた。

「……ミカ」「…え」呆然とするミカに、ミサキは尚も話しかけた。

「あなたは、「こんな私の為に全てを投げ出す気？」と言つてくれた。その恩を今、返そうと思う」

……聖園ミカ、先生。あなた達は、私を信じてくれる？

ミサキは微笑んだ。私はその笑顔を、どうしても信じてしまう。

「……いいよ」先に口を開いたのは、ミカだった。

「…あなたが大丈夫だと自分で思つてゐるなら、私は信じてあげる。……先生」

「……私は、これから解放されるなら……ミサキとミカに見届けてもらうのも、悪くないかなつて」

いいよ。…先生。あなたをその苦しみから解放してあげる。

「だから、私に委ねて」ミサキの…その聲に逆らおうとは、到底思えなかった。

ミサキ、最期までこんな屑で本当にごめん。……そう思いながら、私はようやく掌の力を抜

いた。

……ミサキの持つベレッタが、私の頭に向けられる。

「シッテムの箱も、私が預かる。それでいい、先生？」

「……ああ」

私はミサキにシッテムの箱を渡す。ミサキは、電源ボタンを押した。

…本当にありがとう。君は優しい子だ。そう思つて、私は審判の時を待ち続けた。しかし、ミサキは私を赦さなかった。

「…。」撃つふりをして、彼女はため息をつき、ベレッタを解体した。

「な……！」私は思い浮かんだ。何故だ、ミサキ。…信じていたのに、こんなにあんまりすぎる。早く私を——

そして、最後の審判が告げられた。

「先生。あなたがケジメを付けたいのなら、そうすればいい。………だから」

——選んで、先生。私達を。

それは、ミサキが私に告げた審判であり、告解だった。

「……え」「……先生、まだ分らない？」

私達は先生を愛しすぎてゐる。——それはもう、この世界のあらゆる憎悪にも耐えるほど。だから、私と聖園ミカ、この恋をその手で、あなたが殺してほしい。

「それが教師としての、あなたのケジメの付け方だと、私は思う」ミサキはそう、真実を告知するように言った。

「…先生」「……ミカ」

ミカが私に問う。私は思わず、ミカを見た。ミカもそれでいいのか。

「いいよ。私をこの手で殺して。先生？」ミカは涙ながらに胸に手を添えていた。

あなたが止めを、きちんと刺してくれるなら私はもう何もいらぬ。

だからあなたが、この想いを終わらせて？

ミカはその綺麗な瞳を潤わせながら、そう告げた。

本当に、綺麗だった。私はこの期に及んで、そう思っていた。

「……本当に君を選ばなくても、大丈夫なのか、ミカ」

「それは……、……………本当は、……………ショックだけど……………でも頑張るね！」ミカはほんの少し肩を狭めながら、そう微笑みながら言ってくれた。

先生の出した答えが何でも、出来る限り、私に出来ることをする。…本当に頑張るよ。見ててよ、先生。もう、今までの脆い”魔女”の私じゃないんだから。

ミカはそう言って、目を閉じ、待った。

私を選び、答えを出すのを。

「さあ。——これで分かった？私達はあなたのもの。あなたが決めていい」

でも、選べるのは一人だけだから。だから——貴方の手でそれを終わらせて。先生？

ミサキも、ようやく微笑んでくれた。

その笑顔を、私は純粹に綺麗だと思うしかなかった。

ああ、なんだ。私が君に望んだのは、君が笑顔でいてくれる未来だった。

君が生きててもいいんだって、心から思える未来を、私は思い浮かべたんだ。

そしてその未来は、ようやく来ようとしているんだ。無駄じゃなかったんだ、私の生を使っ

たことは。

戒野ミサキ。君のもとへ、ようやく祝福された人生が迎えようとしている。――私は、それを遂げることができるだろうか。

私は感じている。当たり前といえば当たり前の、ごくごく普通のことを。

何かを選ぶということは、何かを選ばないということ。

誰かを救うということは、誰かを救わないということ。

私はもう、間違えない。

私は――

「聖園ミカを選ぶ」 ↓ [P 1 2 9](#) ↑

「戒野ミサキを選ぶ」 ↓ [P 1 4 3](#) ↑

（電子版はリンクをクリックすることによって該当の選択肢へ移動します。  
青い部分をクリック&タップ（もしくは長押し）してください）





## 「聖園ミカを選ぶ」

僅かな沈黙の後、ミカはただ、「そっか。」と言ってくれた。

「…私を選ぶんだね、先生？」

「……ああ」

私は心から感謝した。あの時や、今まで寄り添ってくれたミカに。

そして、支えてくれたミサキに。

「……」選ばれなかったミサキは、この場を離れようとする。

「……ミサキ」

「……もう、猟犬はおしまい。そもそもお呼びじゃなかったみたいだね、先生。」

「……」

「…私が悪かった。……これまで、私の気持ちを押し付けようとした。それは謝る」

ミサキは、あの時私と出逢った雨の日を、拘置所内のことを、そしてアリウスのドッグタグを預けた時の事を。それぞれ想い出を噛み締めるように言っていた。

やがて数舞の後、ミサキは言った。

「その心も、体も、あなたのもの。だから、……もう、好きにしていよいよ、先生。」

「でも、これだけは言わせて。」

あの雨の日、私を気にかけてくれて、ありがとう。私を、見つけてくれてありがとう。

あの時私を、少しでも愛してくれて、ありがとう。

……あの瞬間は、私だけのものだから。」

「……ミサキ」

「……じゃあね、先生」そう言い残して、ミサキは去ろうとする。

確信していた。私は今ここで、彼女にそれを伝えないと、とても後悔することになるだろう。

もう、ミサキ彼女を私の手で喪うのはごめんだった。

「…ミサキ！」「……！」

私はミサキに、はち切れんばかりの声量を出して伝えた。

「ミサキ、また、シャーレに来てよ。まだ新任の先生も、手伝ってあげることがたくさんあるから！そうやって、サオリやアツコ……ヒヨリと一緒に、また任務が終わったら、みんな美味しいご飯でも食べに行こう！私が奢ってあげるから！」

「……………はあ。なにそれ」

私の告白を、ミカ、そして去ろうとするミサキは黙って聞いてくれた。  
数秒して、ミサキの顔がくしやり、と笑ってくれた。

「…まったく。そうやって、喪つても、拾い上げようとするんだね。あなたは。」

……ありがとう。

ミサキは、そう笑ってくれていた。

もうこれで、私が心配することはないだろう。…私とミカは一緒に、そう言って去っていく  
ミサキの背を、見送っていた。

「…なんだ、あの子も、一緒だったんだ、私と。」

「…え？」と私は聞いたが、ミカは「…なんでもない」と誤魔化してくれた。その仕草が、妙に愛おしかった。

「…先生」「なんだい、ミカ」

教会にただ二人。残されたミカは私に問いかける。

「…聞いて、先生」ミカは勇気を振り絞るように言った。

「私、トリニティの反省室から抜け出してきたの。…私はこれで退学かな」

「……そっか」

「でも、あなたと一緒にいられるなら、…それでもいいかな。…これからよろしくね、先生」

ミカは私の年老いた右肩にしがみつき、ギユ、と抱き寄せた。

私はミカを左腕でさらに抱き寄せ、こう呟いた。

「ああ。……よろしくね、ミカ。だけど、そんな事はない」

「……え？」

どういうこと。…まさか、今更さよならなんて。ミカの瞳が曇っていく。

私は首を振った。まさか。私の言いたいことは違うんだ、ミカ。

「君を退学になんてさせない。…君は英雄なのだから」

ミカはきよんとした。「……えい、ゆう？わたしが？」

その顔すらも、私には愛おしかった。私はミカに対して微笑みながら告げる。

「ああ、他でもない、シャーレの「先生」の生命を救ったとっても可愛い英雄の一人だ。…だから……今度は私が助ける番だ。そんな子を、退学させる訳にはいかなからね。」

そして、腕にしがみついたミカを振りほどき……

「…わっ。」ぎゅう、としつかりと正面から抱き寄せた。

私を救ってくれた、とても美しいお姫様。…もう二度と放さないと、心の中でそう誓いながら。

「改めて、感謝するよ。…大好きだよ、ミカ。…聖園ミカ。私を救ってくれて、本当にありがとう。……君さえ良ければ、これからも私についてきてくれないか？」

「うん………よろしく、お願い………します。」

ミカは真っ赤になりながら、私を抱き寄せる手に力を籠める。

とても柔らかくて、羽の甘い匂いをする。凄く心地良い感触だった。

やがて、十分、いや二十分だろうか。そうミカを放さず抱き寄せていたら、別の衝動が込み上げてきた。

「ミカ。」「…なーに、先生」ミカはとても幸せそうだった。

私はミカに溺れるようにして抱き寄せながら続ける。

「…ミカ。提案があるんだ。折角だし、ここは教会だ。…誓いを、立てようか」

「……うん。」その言葉を境に、私達はようやく抱擁から離れることができた。

私、聖園ミカは紅くなりつつも、その手を差し出した。

先生は、私の手を握った。…とても固くて、心地良い感触だった。

「——誓います。…私は、ここにいる聖園ミカを、病める時も健やかなるときも、富める時も、貧しき時も、……そして、最期の時も愛し、敬い、慈しみます。」

「…誓います。私、聖園ミカは、ここにいる先生——あなたを、病める時も 健やかなる時

も。喜びの時も 悲しみの時も、妻として愛し、支え、最期になる時も真心を尽くし、慈しみます」……どうか、これからよろしくね、先生？ 私はそう言つて、目を閉じて口づけを待った。

先生は、私のその唇と、手の甲に、キスをしてくれた。

先生、私、本当に幸せだよ？——先生も、幸せを感じてくれたら、いいな。

……どうかこれからの日々が、輝けるものになりますように。

私はそう、教会から見ているであろう彼の人に祈った。

## epilogue Can't Say Goodbye To Yesterday

物心付いた時から知っている、少し寂しそうな母さんの面影。

僕は父さんの面影を知らない。

僕の父さんが死んでから、——僕が生まれた後、世界は大変な事になったらしい。

父さんは教師をしていて、父さんの教え子たちはそれぞれ世界をより良くしようとしてたらしいんだけど、それでもうまくいかなかったみたい。

あのひと、父さんが死んでから色んな人々が迷ったり、挫けたり、抜け出せなかった、と父さんが持っていた、ボロボロの弾痕が付いた傷だらけのタブレットにいる人——プラナが教えてくれた。



聞いてみれば、僕の担任だった稗先生も、父さんから色んな事を教わったって言っていた。僕はあの時、先生に聞いた事がある。父さんに何を教わったの、と。

先生は少し笑って、「いっぱい。色んなことを——例えばその場所がコンクリートだったとしても、花は咲く事ができるってことを教えてくれた」

そう言ってたけど、今でも意味がよくわかっていない。

この頃になると、僕を見て少し父さんに似てきたね、と母さんはよく笑っていた。母さんのその顔が、どこか辛そうだったのも覚えている。

そして、僕が15歳になった時、プラナは仕事見学をしてみませんか、と言ってきた。

どんな仕事？って言ったら、プラナは生徒会の先生の仕事ですって言ったので、僕は嫌になった。

やっぱり、そうか。プラナも僕に父さん押し付けるんだ、と。

実際、僕は生まれてから、父さんの事ばかり言われて育ってきた気がする。

しかも、父さんは死ぬ前まで仕事に縛られていたと言うし。ゾツとする。

だから、同じ道を進むのなんて、真っ平だった。それでプラナと喧嘩した。

……じゃあ何がいいんですか、とプラナは少し拗ねながら聞いたつけ。

……言いたくない。少なくとも笑われるだろうし、絶対ロクな事にならないと思ってる。

……僕の成りたい物は、英雄だった。

変身ロボットのよう to 悪人を打ち倒す、とまではいなくても、秤先生みたいな……好きな人を悲しませない為に力を使える様な、そんな正義の味方に、なってみたかった。

……僕は男なのに機械の体でも、犬の身体でもない。

そんななんで、小学中学と、いい思い出がない。男のくせに人間なんで機械とかに生まれてたらかつこよかったしもっと友達いたんじゃないか、とも思うし、小学の頃は仲間外れにさ

れて体育とか秤先生と組まされたり、中学となると体育の授業で偶々シャーレから視察に訪れたサオリ先生に目を付けられ、事あるごとに守護銃や格闘の稽古を付けられたりと、嫌な思い出しかない。

そしていよいよ高校となると、本当に選択肢が無くなってくる。

男の人間が通える高校なんて、キヴォトスにあるかどうかすら怪しいからだ。

母さんに聞かされてた、超女性カーストであるゲヘナとトリニティなんか論外だろうし、父さんが所属してた組織、シャーレから誘いが来てたが、死ぬまで仕事漬けにされていたらしい父さんの話を聞かされて喜んで入ると思うのだろうか。思ってるなら驚きだ。

取り敢えず頭が良ければ特に差別が無さそうだったミレニウムを第一志願として出したが、倍率が数千倍だったので成績が悪く無い方の僕では受かる気がしなかったし、何より僕は工学、プログラムとかに全く詳しく無いのでさらに受かる気がしない。

そんなこんなで、唯一入学案内が来ていた「アビドス高等学校」に行くぐらいしか道が無か

った。最初は過疎化が進んでる高校と聞いてそりゃあいい、人間関係で苦しまされてきたから楽できそうだ、と思ったが、入ってみれば廃校寸前、しかも3億円の借金があるとか入学式で言われて啞然とするしか無かった。(これでも減った方です、と自慢げに担任に言われたがどうすれば一学校が億単位の借金を抱えられるのだろうか分からなかった)

おまけに治安も悪く、丁度父さんが死んだ頃と同じくらいの年にカイザー何とかという企業が経営難を理由に借金の差し押さえに乗り出し、まだ時々来る組織に雇われた不良達と戦ってる最中とか言うので眩暈がした。この高校ちゃんと生徒を卒業させる気あるのかよ、とすら思った。

そんな訳で、僕も否応無く巻き込まれていく事になる。半ば宿命みたいな物だった。父さん。あの人が残そうとした物と、それを奪おうとする者の戦いに。

父さんが残してくれた、A.R.O.N.A.を使って。

僕は大人じゃない。だから、大人の不条理に押し付けられるのでは無く、僕が守りたいと思  
った物を守る為に。

父さんは、どんな人だったの。そう母さんに聞いた事がある。

母さんは、胸を張る様に笑顔でこう言った。

優しくて、少し頼りなそうに見えるときもあったけど……でも、私が世界で一番愛してる  
……この世界で、私を見つけてくれた王子様だった、と。

呆れるしか無かったが、僕はそんな母さんが好きだった。

▶ もう一つの未来を見る

## 「戒野ミサキを選ぶ」

「……そっか。…私を選ぶの、先生？」

私はミサキの手を取った。ミサキはどこか、信じられないような様子でそう言っていた。

「……うん」私はそう誓った。

「……。そつ、かあ、……。よかった」背後から、希望が、感情が、崩れ落ちるのを感じた。

「……」。私はそれでも、振り向き聲をかけようとした。

でも、残酷なことに、かける声が見つからなかった。

「振り向いちやダメ。……お願い、振り向かないで。…何も云わないで」

「……ミ、……。」

「それでも……振り向いちや、ダメだからね？……ミサキちゃん、私は貴方を赦すよ。」

「……うん」目の前にあるミサキの瞳が、紅くなるのを感じる。

背後にいる少女も、きつと同じなのだろう。私はそう思った。

「これで仲直り、しよう？……先生、ごめんね、今まで。…だからミサキちゃんを幸せにす

るんだよ？」私の後ろから、ミカはそう投げ掛けた。

「じゃあね、先生。……楽しかったよ、あなたと逢えたこと、私を救って、くれたこと。」ミカは背後から回り、私から姿を見せずに教会を去ろうとした。

私はそれを、ミカの行動を赦すことはできなかった。  
意を決して、私は振り向いた。

「……ミカ！」

「……振り向いちゃダメだって、言ったのに。」

その現実を視<sup>かお</sup>ちやったら、私は、もう、その心<sup>あなた</sup>から戻れなくなるかもしれないのに。

……それでも、私は振り向いてしまった。そしてその顔<sup>げんじつ</sup>を視て驚き、ぼろぼろに崩れて壊れそうになるミカに告げる。

「ミカ。君に言わないといけないことがある」

私はミカに声を掛ける。ミカに対して、最後の授業をするために。



「……なに、先生？」ミカは、最期の心を振り絞って気丈に振る舞おうとする。

「…君が望むなら、私は教師として、生徒に教えなければならぬことがある」私はミカにそう告げた。一人の人間としてケジメを着けるために。

そう、教師として、最後の責務を果たすために。

私はここに誓った。

「ミカ。君が自分を傷付けるなら、私は何度でもそれと向き合おう。

君が自分を赦せないのなら、何度でもそれを容けいれよう。

君がそれでも一步を踏み出せないなら——私は何度でも君に歩み寄ろう。

私が生きている限り、——ずっと」

「……うん。」ミカは、涙腺が緩みそうになりながら、ただ私の言葉を待っていた。

それが私の役割だからね、と私は尚も続ける。

「私はここに誓おう。聖園ミカは、魔女でもお姫様でもない。

自分を受けいれることが下手なだけの、ただ一人のちっぽけな、愛しい人間なんだ。

そして——私を救ってくれて、ありがとう」

私を見つけてくれて、本当にありがとう。と、それだけ言って、あとは何も言わなかった。

「……そっか。——先生、こちらこそありがとうね。」ミカはそれだけ言って、後は何も言わなかった。

私はもう一つ、ミカに言葉を付け加える。

「それと、退学のことについてだが、気にする必要はない」

「……え？」ミカはきよんとした。

「私が掛け合おう。君たちは私の命を救ってくれた、今度は私の番だ」

「……いいよ、別にそんな」ミカは照れくさそうにした。

「いいや。シャーレの「先生」を救った英雄を、世界が酷い目に遭わせる道理はないからね。」

私はそのままミカに笑顔を向けた。自分ができるだけ精一杯の、笑顔を。

「……何それ。先生、笑顔上手くないね。…変な顔。」ミカはそんな私を見て、心から笑い返した。

「ありがとう。……うん、でも、今度は私から向き合いたい。私から、できる限りちゃんと

私の問題に向き合うよ。……それでも無理だったら、助けてね。先生？」

「……ああ。約束する。ミカ」

「うん？」

「君は魔女なんかじゃない。そのことを、ようやくこの世界に証明できた」

「……うん。………ありがとうね、ここまで、私を救ってくれて」

ミカのそれは、安堵の涙だった。

ようやく自分を赦せたことに対する、安堵の涙だった。

暖かい赦しの涙を抱きながら、ミカは教会を去っていった。

私とミサキは、それをずっと見守っていた。

「……ミサキ」

「……なに、先生？」

ミカが去ったあと、私はミサキにずっとミカに向き合うのを待ってくれたことに感謝し、告白した。

「あの時、ミカは『あなたの心も、身体も君——ミサキのものじゃない』って言ったけど。でも、今からは違うんだ。」

「……それは、どういうこと？」ミサキは首をかしげる。

私は自分の胸に手を当て、言った。「ミサキ。僕のハートをあげる。」

少し驚くミサキに、私は尚も続けた。

「私の心も、魂も、今から君のものだ。だからずっと、離れ離れになっても、離さないで。——誓うよ。いついかなる時も、私の魂は君の心と共にあると」

「……うん。」

「私は、今から君のものでもあるんだ。……だから何があっても傍にいるよ。」  
そう言い終える、私に対して、ミサキは——顔を紅くして、私を抱き締めた。

「誓って。ずっと……私たちはずっと。一緒だよ、先生？」

「……うん。誓います。私は、戒野ミサキ、君の心が病める時も、健やかになるときも。……壊れているときも、最期の時も。愛し、向き合い、慈しみます。」

私の誓いの言葉を聞いて、ミサキは心から笑ってくれた。

「……誓います。私は。心が壊れているときも、健やかになるときも。愛しているときも、死が二人を分かつときも。貴方と供に歩み、慰め合い、傍にすることを。誓います」

——そうして抱き合いながら。私たちは、ようやくあの時のお返しをしようとした。

目を閉じるミサキに、私は口づけを交わした。——本当に、幸せを共有できた。

少なくとも、日が沈むまでそうしていたかった。——けど、それは唐突に終わってしまった。ミサキのお腹が、ぐうと鳴ったからだ。

「……あ」

「……っ！」ミサキは、自分で鳴らしてしまった音に驚いたようだった。その顔も、とても可愛かった。

「……誰かさんのせいで、ご飯も食べてない。……責任取つてよ。」

ミサキは、少し恥ずかしそうにしながら、拗ねながら言った。

「……はは。……そうだ、このままご飯食べに行っちゃおうか。」

「……うん」ミサキは、少し照れながら言った。

「さ、人生を楽しまなきゃ。ミサキは何が食べたい？」

「……先生が食べたいものを、一緒に食べたい。」

先生と私は、互いの掌をぎゅっと握って教会を後にする。

私は心から、その想いを感じていた。

……ああ、こんなに尊いものだったんだと気づいた。私が犠牲の果てに辿り着いた、こんなにも得たがっていたごく普通の幸せは。

私は未来に想いを馳せる。その幸せは、いつまで続いていくんだろう。

時の果て、いつか待っている終着点から、私たちは、どこに辿り着くのだろう。

## epilogue Almost nothing

ねえ、聞こえてる？

聞こえてなくてもいいんだけど、聞こえてたら、いいな。

あなたがこうなってから、世界は争いばかりで、ぼろぼろになってしまった。  
あなたは、もうすぐ……そのときに、修復はもう無理かもしれないほどに。

でも、あなたは私をあの時、見つけてくれた。そのことが重要なんだよ。  
わかる？……その命の意味も、答えも、あなたが教えてくれたんだよ。

私たち、今はみんな迷っているけど、いつか本当のこと、——私たちがより良くできる場所、あなたがいつか目指した始発点へと、辿り着くことができるはず。

そのために、サオリやアツコ、ヒヨリ……そしてミカも、必死になって伝えているから。

次の世代に、必要なのはここにいるみんなだということに。

あなたの心は、たとえいなくなっても私とともにあるから。

…だから、私も約束する。あなたの心を、私に宿ってる次の命に、託してみせる。

次の世代に必要なのは、私は、あなたが残してくれた意味だと信じてる。

それを教えてくれて、本当にありがとう。…貴方はもう、十分過ぎるくらい努力を果たした。

だから、安心して眠って。…愛してるよ、大好きだよ。

おやすみ。

さよなら。





▶もう一つの未来を見る

あなたさえ良ければ、この世が  
瓶詰の ■ ■ —— 地獄ではなく、天国の片隅になる事を祈って。

瓶詰の ■ ■  
Fin.

## 謝辞

・special thanks・

試読して下さった irohasu 氏、てるさん、初版を推敲して下さりカルパノグの兎編二章との矛盾点を指摘して下さった P 氏、そして挿絵の九十九仇氏に心からの感謝を捧げます。

## 奥付

### 瓶詰の■■（電子版）

第一版 2023 年 6 月 24 日頒布

サークル名 Project-Leonard(プロジェクト・レナード)

著者 chairo(@chairo83008128)

Illust 九十九仇

(宜しければ作品の感想など DM でお待ちしております。)

連絡先 kouseichairo@gmail.com

本作品はゲーム「ブルーアーカイブ」の二次創作作品です。

本作品の無断アップロード、無断転載を禁じます。